

印度藏志略

15  
2  
40

(M)

014734-001-2

15-40

印度藏志略

平田 篤胤/著

1卷

M21

ABC-0022

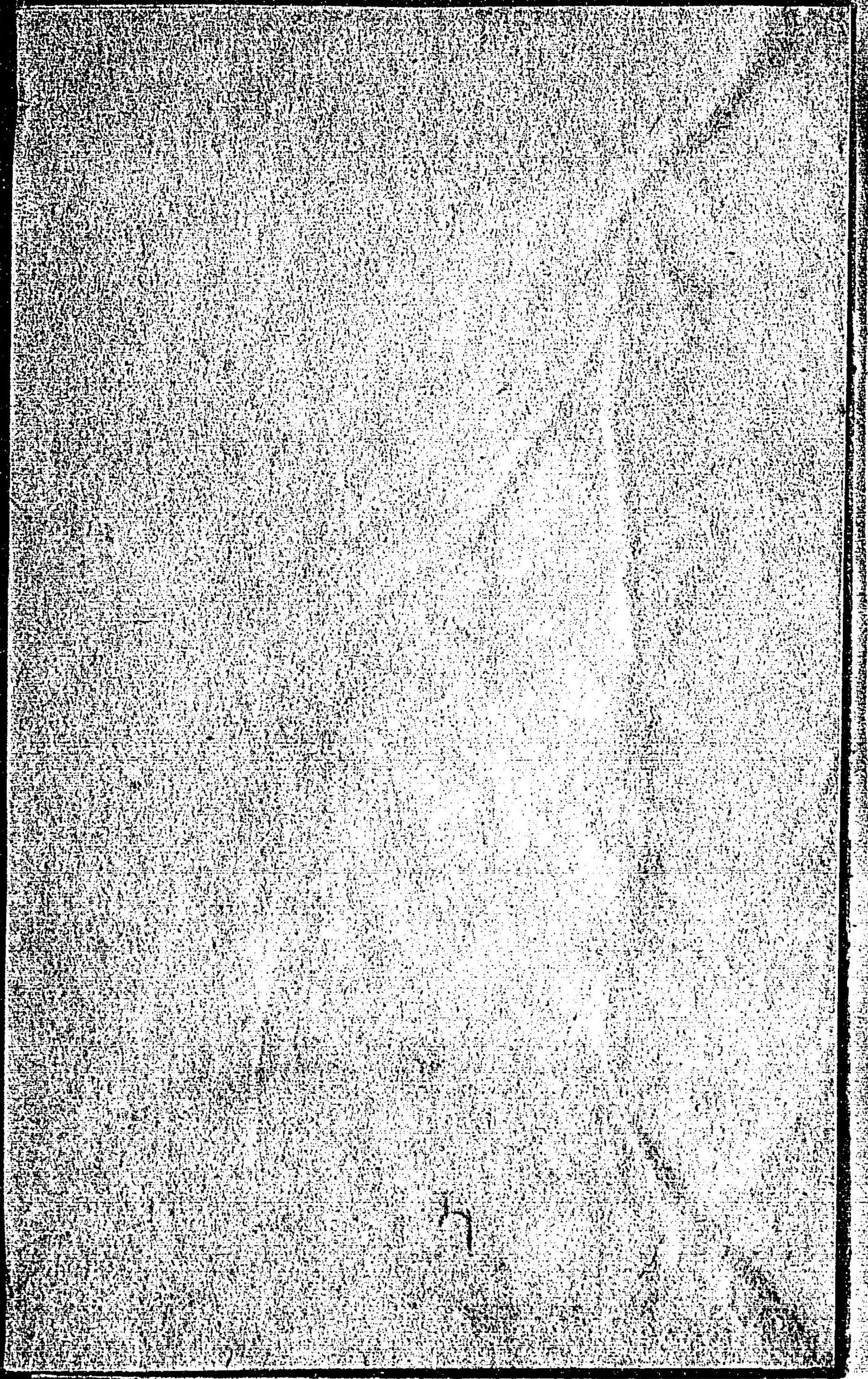






東泉園香朝

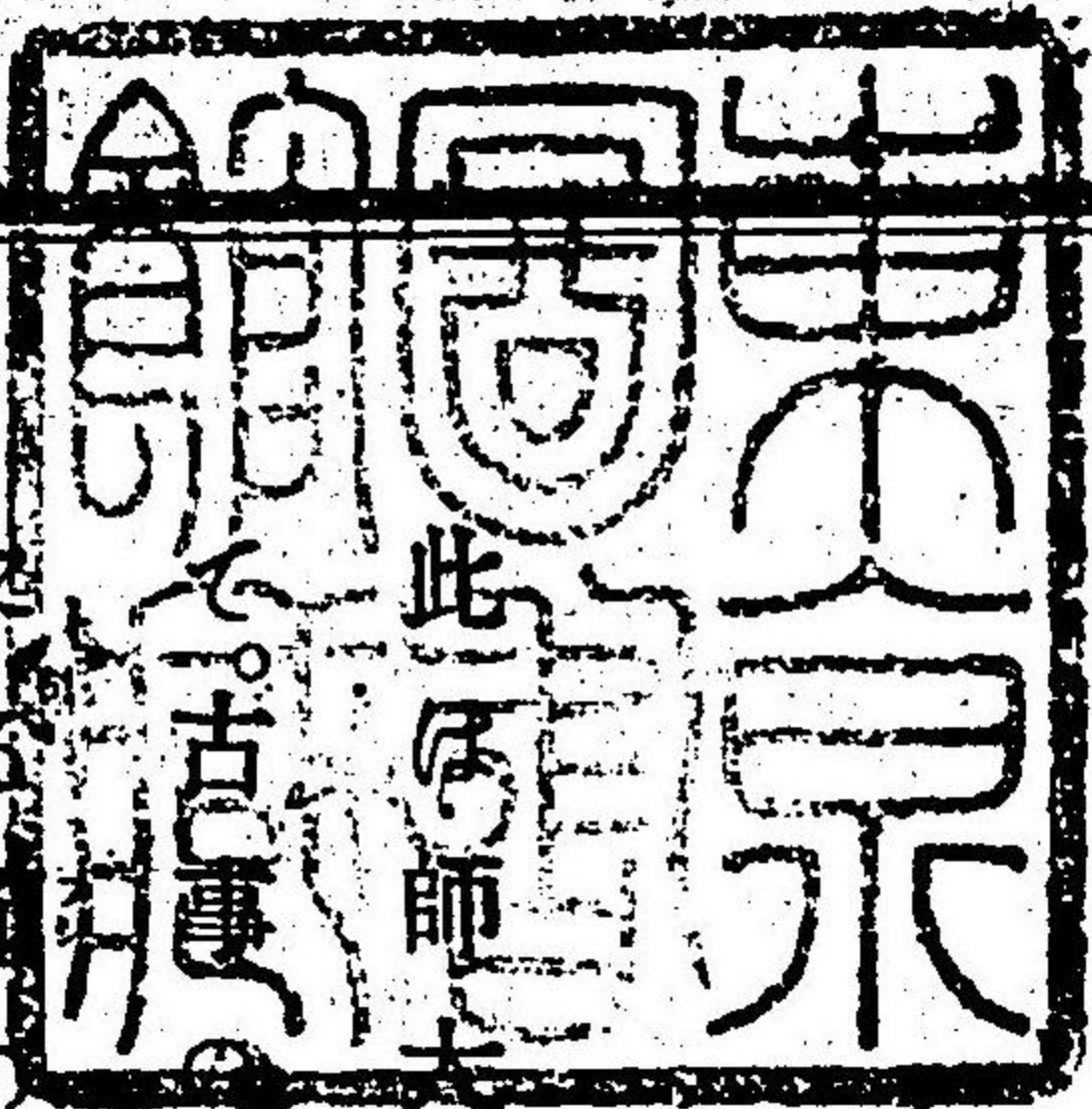
冊	子	架	函	屬	類
---	---	---	---	---	---





No. 11668

印度藏志略一之卷



大壑 平田篤胤 撰

門人 矢野玄道

孫 平田胤雄

門人 井上頼國

同 戸澤盛定



此係師夫  
 人の。外國等も古事の餘有やと。あまねく見通し  
 餘有と引來て。成畢られし本編の。甚浩博精妙も過  
 たる節の。多有は。未熟輩のふと打見ては。要領を得難しすな  
 るが殊惜ければ。皆人の心の固とも成可。大旨を好程に節略  
 出よと。田中頼庸主も唆れての業なるを。己本より。斯有條の  
 學よの。甚鈍て。諸越の吉野の山を開路も。躡心地のみせられ。  
 且大匠も代て。手を傷。櫃を得て玉を還と云らむ様の後言を



のみ畏思ど。然に辭難の業よなむあるを。淑人熟見て。見直聞直給てよ。

### ○印度國俗品第一

印度種姓。族類群分。而婆羅門特爲清貴。從其雅稱。傳以成俗。無云經界之別。總謂婆羅門國焉。

印度國の種姓。族類の群分せること。謂ゆる四姓を始。佛籍等よ散見して今盡計るよ暇非。さて然諸姓の多有中よ。婆羅門種を殊よ清貴となす由緒は。此種族は。始て世間を成立せる大梵王の子。梵天の苗胤よて。世々其稱を襲來よ因。

此ハ義淨三藏が寄歸内法傳に。五天之地。皆以婆羅門爲貴勝。

凡有座席。並不與餘三姓同行。自外雜類。故宜遠矣。とある三姓ハ。刹利。毘舍。首陀の三姓よて。此中ハ刹利ハ王種あるすら。同席同行せよと云を以ても。婆羅門を貴勝と爲よと知れたり。又其稱を雅として。國の號よも負よる由ハ。婆羅門てふ語も。梵天の梵と同語なるが故なり。

彼内法傳よも。印度說之爲月。雖有斯理。未是通稱。五天之地。皆曰婆羅門國と云。其餘の書等よも多。婆羅門國と見より。

此等の事の起原を知むと欲するよハ。先彼國太古の傳説。大梵王の事より。明し辨めては知難。然るは先。其の古傳説の主旨を云は。大虚空上よ。大梵天とも。梵自在天とも。大自在天とも稱。無始無終の天界有て。其の界よ大梵王とも。那羅延天とも。摩醯首羅天とも稱。大主宰の天神有て。是亦無始無終の神あるが。無よ



り有を出て。此の世間を成立。人種ハ更ニも云々。萬物を化生せる故。世間衆生の祖神ありと語傳來り。

大梵王を仁王般若經ニハ。大靜王とあり。靜ハ梵の譯語あること。下ニ註ガ如。

其ハ提婆論ニ。摩醯首羅論師說。梵王那羅延。摩醯首羅一體三分。所有一切命非命物。皆從自在天生。從自在天滅。自在天身者。虛空是頭。日月是眼。地是身。河海是尿。山丘是糞。火是熱。風是命。一切衆生。是身內蟲。自在天常生一切物云々。

提婆論を具ニハ。提婆菩薩釋楞伽經中外道小乘涅槃論と云。一切經藏ニ收り。提婆トハ龍猛論師ガ弟子あり。迦那提婆論師なり。さて此の文。今本と文義通難事等有ハ。中論疏ニ引ると。校合て引り。其の心して見べし。今舉たる傳と。大梵

自在天王の天地萬物の本祖主宰とる。大徳を語傳とる古説の遺ニ殘るよて。西戎籍ニ。盤古氏之左右。目爲日月。毛髮爲草木。頭手足爲五岳。泣爲江河。氣爲風。聲爲雷云々。など謂るニ能似り。一偏ニ寓言とのみ勿見くたし。實ニハ天地世界。此神の神靈ニ頼て成り。と云傳なれば。斯傳とるも。意味ある説なり。俱舍論光記ニ。自在天。出過三界有。三身。一法身。遍充法界。二報身。居自在天。三化身。隨形六道。種々教化。と云る法身ハ。即今引文の趣かり。

又摩陀羅論師說。自在天造作衆生。那羅延言。我造一切物。我於一切衆生中。最勝。我生一切世間。有命無命物。若人至心。以水草華果。供養我。我不失彼人。彼人不失我云々。又本生安荼論師說。本無日月星辰及地。唯有大水。時大安荼生。如鷄子。周匝金色。時熟破爲二



一段。一段在上作天。一段在下作地。彼二中間生梵天。名一切衆生祖公。作一切有命無命物云々。

此傳也。西戎籍。世の初を語て。天地渾沌如鷄子。盤古生其中。萬八千歲。天地開闢。清輕者上爲天。濁重者下爲地。盤古在其中。一日九變。神於天。聖於地。天極高地極深。盤古極長。此天地人之始也。と云るは甚熟似たり。

又女人眷屬論師說。摩醯首羅作八女人。一名阿提儼。一名提儼。三名蘇羅婆。四名毘那多。五名迦毘羅。六名摩提。七名伊羅。八名歌頭。阿提儼生諸天。提儼生阿修羅。蘇羅婆生諸龍。毘那多生諸鳥。迦毘羅生四足。摩提生人。伊羅生一切穀子。歌頭生一切蛇蝎蚊蠅蚤蚰蜒百足等云々。

中論疏。梵王生八天子。八天子生天地萬物。是衆生之父也。と

云るは同趣の傳あり。

増一阿含經。梵天の語として。此處無爲之境。無始無終。無生無死。無老無病。亦無愁憂苦惱云云。發智論。如梵衆天說。大梵王得自在。於世間能造化。能出生。是我等父。かど有。て古傳の趣を知るべし。

なほ經論疏とも。外道れ説として。大梵王者。能生萬物之本。と云。或は衆生常識。梵天。以爲祖父。など多。見て。今悉計。べくも非。次々とも引出るを見よ。能も本朝れ古傳。符合る傳とも有。さて上より引。提婆論。梵王。那羅延。摩醯首羅。一體三分と云る。此事の華嚴經。も所見するが。先。大自在天と云は。譯語にて。一切經音義。摩醯首羅。此云。大自在天。と數所見。諸天傳。摩醯首羅。此翻。大自在天。或翻。威靈帝。と言。



名義集。大論を引て。摩醯首羅。正名。摩訶莫醯伊濕伐羅。此云。大自在と見。案。訶莫の衍字か。さるの摩醯の大と翻。伊濕伐羅の自在と翻語なればかり。華嚴經音義の摩醯首羅。正云。摩醯濕伐羅。摩醯此云。大。濕伐羅者自在也。とも有。よて知べし。三論立義。有云。大自在在天。能生萬物。萬物若滅。還歸本天。故云。自在。若。嗔。則四生皆苦。自在喜。則六道咸樂。云云。と言。り。なほ此文の連次。然。天非物。因物非天。果蓋是邪心所畫。と云。文有と。其の佛者が例の神を知。さる僻論あり。さて。摩醯首羅大自在天王頂生天女法。摩醯首羅天王。於大自在天上。云々とあり。

又同法。摩醯首羅大自在天神とも見。然れば大梵天。大自在天。同天界の二名あること著明なり。さ

てこそ下。引。長阿含經。大梵天界の事を。梵自在天と。い。又他化自在天と稱。るも。同天なり。其の由。第三品の末。委云べし。

さて那羅延天とも稱。る由は。俱舍論音義。那羅延天。那羅此云。爲人。延。那此云。生本。即。是大梵王也。外道謂。一切人皆從。梵王。生。故名。人生本也。と云。

俱舍論頌疏。那羅延。此云。人種神。と見。其の遁隣記の音義。同。但此の記音義共。外道謂。と云。るは。婆羅門を始。諸異道の輩は。然言。とも。佛法。よては。梵王を。人生本と云。説。と取。ぎ。と云。意を。含。り。

俱舍論。又大自在生主ともある。光記。生主。即。是。梵王。能。生。一切世間。是。世間主。と云。り。此。等。を。合。考。て。大梵天王。大自在天神。那



羅延天。皆是同天神の異稱なる義を辨べし。

那羅延天と云ふ就て辨べき事あり。其の大涅槃經ある那羅延と。其音義は。那羅延此云力士。或云天中。或云人中力士。或云金剛力士。或云堅固力士也。又六波羅密多經音義は。那羅延梵語。欲界天名。此天多力。身綠金色八臂。乘金翅鳥王。手持鬪輪及種々器仗。每與阿修羅對爭也。又大般若經音義は。那羅延梵語。欲界中天名也。一名毘紐天。欲求多力者。承事供養。若精誠祈禱。多獲神力也。など見。大部補註は。那羅延多力天名也。かどある那羅延と。謂ゆる密迹金剛力士神の事にて。上は論那羅延天との別あり云々。

なほ大梵王の異名を言は。因明論は。商羯羅天。是摩醯首羅天。於一世界中。有大勢力と有て。其疏は。商羯羅者。此云骨鎖。劫初。梵王下。化人間。以苦行。形骨鎖相連。人慕其化。造像供養。と云。

大日經住心品の疏は。商羯羅天。是摩醯首羅天。別名と云。其の冠註は。商羯羅。此云骨鎖天。劫初。梵王化人間。苦行。像貌也。とも見たり。

優婆塞戒經音義は。毘紐天。梵語。那羅延天之別名也。

一字頂輪王經音義は。毘紐天。紐或從糸作紐。或云尾。瑟努天。古曰。毘留天。即持輪天也。とも云り。

又瑜迦師地論音義は。毘瑟菟天。舊云。毘搜紐。或云。毘紐。皆訛也。是伐藪天。別名也。舊言。婆藪天也。と見。顯揚聖教論音義も。是と同説にて。此天有大威德。乘金翅鳥。行時有輪以爲前導。欲破即破。無有能當也。と云。中論疏は。韋紐天。手執輪戟。有大威勢。故云。萬物從其生也。など言り。



大日經疏。韋紐天。自在天。別名とも。那羅延天。毘紐天。別名とも云て。其冠註。弘決を引て。毘紐天。亦云韋紐天。亦云韋綵天。此翻遍勝。亦遍淨。俱舍云。是第三禪頂。淨影云。胎藏。那羅延天。眞言云。毘瑟拏。是與毘瑟紐同也。毘紐天。有衆多別名。即是那羅延天。別名也。毘是空義。瑟紐是進義也。乘空而進。所謂此天。乘迦婁羅鳥而行。空中也。と云り。大涅槃經。音義。も。毘紐天。亦作韋紐天。此云遍同。亦云遍勝天。ともあり。なほ異譯あれと煩ければ漏つ。

また十二天。餞軌。伊邪那天。舊云。摩醯首羅。唐云。大自在天也と云。

又火咩軌別錄に。東北方。大自在天王。咒。唵伊舍曩曳娑嚩訶とあり。提婆論。伊餘那論師。說。伊餘那尊者。形相不可見。遍一切

處。以無形相。而能生諸有命無命。一切萬物。云々と見たり。此の古傳を甚説曲たる。後の論師等が私説と聞たり。

瑜迦師地論。音義に。世主天。此梵天之異名とも。魯達羅天。此云暴惡。自在天之別名也。ともあり。

大毘盧舍那經。黒天とある。其疏。は梵音魯捺羅。俱舍頌疏。光記。魯達羅。此云暴惡。大自在天。總有千名。今現行世。唯有六十。魯達羅。即一名也。とあり。暴惡の義をもて名たるの。謂ゆる塗炭外道の業なり。

大梵自在天王の異號。斯の如多。今擧る所。凡十二名あり。

なほ異稱多るを。其は思旨。有は。次々論を見べし。

此の人間を化る威靈の卓越たる神ある故。其の功德の様々。依て。人間より稱號を貢たるにて。元より此神の然種々に名



告るよの非。と知べし。此よ類たる事。皇朝の神典よも多り。

其の功績の高。徳業の勝たる神等よ。殊よ異名の多有を。別神とせるも多有て。古史徴よ具よ論るを見て。印度籍をも准想べし。然を諸經論よ。右よ舉る名等の中よ。二三を並て。別神の如説作る説等の多有と。名の異なるを。別神と思混てなり。其の彼經よ。別神とせるが。此經よの同神と。彼論よ同神とせるを。此論よ別神と爲て。其説の定さるよて辨べし。其一を云は。十二天。餞軌よ。伊邪那天。摩醯首羅。大自在天を。一神とせるを正けれど。大梵王を別神と爲て。其餞軌をさへよ。別よ舉たる類なり。然は大自在天王を。大梵王とい別なる神として。或は居色究竟天と云。或は十地の菩薩よて云々など云る説とも。總て取よ足せ。彼安然が悉曇藏よ。入大乘論などを引て。摩醯

首羅有。三種。云々と云る説の類の。愚を極たる説よて。英斷の才無の更なり。諸經論等悉。佛滅後數百千年の間よ。異部各其の傳聞せる事。又各の臆見を以て。記る物なる故よ。其説の異同ある事を知せ。佛經と云は。佛祖が説とのみ心得て。一向よ護法の念の進る故よ。此と彼と符さる事をも。強て合て。さる愚説等の多るなりけり。

さて婆藪天と云。名よ就ての事實の。俱舍論。頌疏法盈註よ。劫初之時。自在天二十四返。人間行化。第二十四返。現よ三日八臂。身。遇よ足目仙人。語曰。如我面上有三目。即堪與我論議。仙人舉足報曰。如我足下有目。即與論議。天知墮負。却歸本天。更不復來人間。

足目仙人とい。優樓佉仙が事なるべし。亦名を眼足とも云ればなり。知墮負とい。仙よ負たる由か。仙が自負に墮て。高貢な



るを知たる由か詳ならき。

時人仰慕天德。爲之立祠。鑄黃金爲身。頗梨爲眼。座高二丈。號此天像。爲婆藪盤豆。謂與世人爲親愛。故云世親。とあり。

沙門鳳譚が俱舍頌疏冠註に。立非譚婆藪。此云世盤豆。此云親。其像多爲世人親近供養。西方人呼爲世親天。と有。彼世親論師と云。し。此天廟の祈て設たる故。世親と云る由見たり。西域記。健駄羅國の所。自古作論師。有那羅延天。世親本生處也。と有。是なるべし。今本此文。誤脱あり。今俱舍頌疏冠註に引る文を以て正。此に用なき文を略て引たり。又大涅槃經音義に。婆藪天古音。此名寶。亦名地。亦名物也。とも見。

さて此文。第二十四返。現三目八臂身。と有。は。三目八臂。一時。足目仙が高貢心を試む爲。假に現る。よて。本形に非。然は補行

記。又名義集など。大論を引て。大自在天。八臂三眼。騎白牛。執白拂。有大威力。能傾覆世界。擧世以尊之。など有。此。時權に現たる形を。時人寫傳たるよど有ける。

されは。大自在天王頂生天女法。天王三面六臂。顔貌奇特。端正可畏。と云。金七十論に。自在天。二頭三手。など有。共三目八臂の誤なり。大涅槃經に。八臂天とある音義に。此云那羅延天。とも見たり。此像貌に就ても。辨べき事あり。その諸天傳に。經中別有摩醯首羅。乃藥叉神。非此天王。孔雀經云。摩醯首藥叉。止羅多國住是也。光明經鬼神品。先云大自在天。次云大鬼王摩醯首羅。即藥叉者。由二神皆有。三目相濫。今古畫像作兩種。一作菩薩相。三目八臂。一作藥叉形。赤髮髮起。三目八臂。今既曰大自在及威靈帝。非藥叉矣。と云る。然説なり。なほ本書を披見べ



し。然と文甚拙て。通難説も少らき。

さて上は擧たる。大梵王の異名の説々依て。熟々其事實を考る。梵の下は註。如。淨とも靜とも譯。仁王經は。梵王を大靜王とも有て。大梵王と云。名よての事實の。甚溫柔に聞るを。自在天王と云。を始。其異名よての事實の。悉強猛なる趣は聞るを思に。印度籍は。其説の無けれど。我が神典の傳説を。姑借て説む。大梵王とい。其本體の名よて。和魂を兼。大自在天王と云。を始。種々の名等の。其和魂を動用。種々は碎心して。人間を化育せる功德は。因て負たる。荒魂の名等と聞たり。

神典なる和魂荒魂の事。古史傳は説たれば。今更は委曲と云。印度籍を凡て神魂の事を説ふと精密よて。一體分身なと云。説も聞て。中よ論得たりと見る説も多れど。和魂。荒魂。

幸魂。奇魂などの事は。つや能知。きぞ有ける。此等の事ども。我が神典を除て。世は其玄妙微旨を知べき籍の有ことなし。

さて又梵王と云。梵天と云。は差別ある事なるを。大抵の籍等。此を混して。梵王と云。べきを梵天と書。梵天と云。べき所は。梵王と載るも多る。鹿漏と云。べし。

上は引たる籍等も。此過多り。熟々見辨べし。

故此は其差別を標示は。長阿含堅固經。一比丘が。此身四大。地水火風。何由永滅。と云。ことを知むとて。天道は赴りと云る妄説中。彼比丘詣梵天。上偏問。梵天。梵天報言。我等不知。今在大梵天王。無能勝者。統千世界。富貴尊豪。最得自在。能造化物。是衆生父母。彼能知。彼比丘問。彼梵天王。今在何處。諸梵天言。不知所在。爾時梵



王忽然出現云々とあり。

此比丘が名を。増一阿含經の馬勝比丘とあり。

此の目易を一事舉たれど。阿含と大抵。この差別を書著り。是を以て。梵王と梵天と。混まらざりし事を辨べし。

凡て阿含經の諸佛經の最先に記する物なる故。自故實の證となる文句の多し。其說法の妄説も妄説ながらに。後に成る經論等の佛意を背する事を糺辨べき事甚多。熟見て熟辨べし。

さて梵王の天地世界及人種の大元祖神にて。梵天と云ふ。其子なるが。許多ある故。梵補。梵衆かと云て。彼梵天界に住し。地界にも降て。人間を教化せる由なり。其の金七十論。皮陀傳説。昔時梵王生有四子。一名娑那訶。二名婆難陀。三名娑那多。四名娑難鳩摩羅。此四子十六歳時。四有自然生。謂法智離欲自在也。

云。中論の疏。梵王生八天子。八天子生天地萬物。是衆生之父也。又提婆論。從那羅延天。臍中生大蓮華。從蓮華生梵天祖公。從梵天口中生婆羅門。云々など有を會見て知べし。

那羅延天との。梵王の異名なること。上は云が如。臍より蓮華を生と云ふこと。其物いかは蓮華に似たらむも。眞の蓮は非れは。打任て蓮華とは云ふまじきを。如此云るは。拙文あり。此事中論疏にも見たり。印度にて蓮華を殊もて嚙事の本は。是よりや起つらむ。

さて婆羅門種との。梵口より生たる種姓の由にて。梵種と云ふに同。其の西域記に。東印度境。迦摩縷波國。周萬餘里。氣序和暢。風俗淳實。語言少。異中印度。性甚獷暴。志存強學。宗事天神。不信佛法。故自佛興。以迄于今。尙未建立伽藍。招集僧侶。其有淨信之徒。但竊念



而已。天祠數百。異道數萬。今王本那羅延天祚胤。婆羅門之種也。字婆塞羯羅伐摩。唐言胄號拘摩羅。唐言童子。自據壇主。奕葉君臨。逮於今王。歷十世矣。國王好學。衆庶從化。遠方高才慕義。客遊雖不信佛法。然敬高學沙門。云々とある。那羅延天。即梵王なれば。其祚胤と云て。婆羅門之種也と云る。上に引提婆論の説とよく符て。婆羅門種とは梵種と云に同こと著明なり。故なほ梵と婆羅門と。同語ある由を辨は。長阿含四姓經に。婆羅門種等が常語を舉たるに。我婆羅門種最爲第一。餘者卑劣。我種清白。餘者黑冥。我婆羅門種。出自梵天。從梵口生と云。由見。

此説を破る佛説に。四姓種共に。善行の者あり。惡行の者あり。惡行の者等。餘の三姓種に在て。婆羅門種のみ。惡行の者なくは。婆羅門種。我最爲第一。餘者卑劣と云。ことを得べし。また婆

羅門種の嫁娶產生を今見に。世人と異なし。而に我が種も。梵口より生ると云。詐ありと。言痛論れど。皆僻論なり。其は護法家の爲に聊言む。此方の姓種にも。皇胤と蕃種とあるを。皇裔の元と。伊邪那岐神の御目より。生給るが始なり。而はかく蕃息ふて。皇裔蕃種とも。不善行の者あり。又產生も異無を以て。皇裔なりと云。を。詐として可ならむや。熟々此理を思べし。又中阿含梵志品。衆多梵志曰。梵志種勝。餘者不如。梵志種白。餘者黑。梵志得清淨。非梵志不得清淨。梵志梵天子。從彼口生。梵梵所化とあり。

此梵志説を破。佛祖の論る説等。最可笑中。も。草馬と父驢と。合會て生たるを。何と名むと譬て云る説など。實に抱腹し堪ざる強説なれど。煩ければ記せ。凡て佛祖の婆羅門種



の梵裔なる事を言破るよの深旨ある事なり。

此と同事を雜阿含經よの婆羅門自言。我第一。他人卑劣。我白餘人。黑。婆羅門。是婆羅門子。從口生。婆羅門所化。是婆羅門所有。と見たり。

此語の弟子所説誦第六品。摩倫羅王が佛弟子。迦旃延に問る語中に見たる語なるが。迦旃延が答よ。此世間言説耳。云々と云るの既よ師の誣説よ化せられたる後の説なれば。論よ足き。大論よも。婆羅門從梵天口邊生。故於四姓中第一。と云るをや。其餘よも。此意趣の語等計るに暇あらざ。

長阿含雜阿含よ。婆羅門とあるを。中阿含よ。梵志と云。長中二阿含に。梵天子とあるを。雜阿含よ。婆羅門子と云り。是を以て。梵と婆羅門と。同語なること著。殊よの。金光明。最勝王經。音義よ。婆羅

門。梵語訛也。或曰婆羅賀摩亦訛也。正音云沒囉憾摩。唐云淨行。即初禪梵天名也。彼國人民四類差別。婆羅門其一也。自相傳云。我從梵天口生。獨取梵名。以為其稱。云々と言。

又雜阿毘曇心論。音義よの。婆羅門訛略也。應云婆羅賀摩。此義云承習大法者。經中梵志亦此名也。正云靜胤言是梵天之苗胤也。とも云り。

華嚴經。音義よ。梵謂梵摩具云跋濫摩。此云清淨。葛洪字苑曰。梵淨也。又法華經。音義よ。梵天梵摩。此云寂靜。葛洪字苑訓梵為潔也。又不思議境界經。音義よ。婆羅訶摩。梵語即梵天名也。など有は。婆羅訶摩。跋濫摩。沒囉憾摩。婆羅門など。唯少の轉訛なるが。梵摩と切。其を再略て梵と言ること著明なり。

是本朝の古語の轉て。延縮する趣よ恰も似たり。此を印度語



耳ならぬ。誰の國も。訓語を總て斯ぞ有ける。

是ら合考て。婆羅門といふ。と梵天を云稱なるを。婆羅門種と。其の苗裔なる故。世々其稱を襲來ること知べし。

大般若經音義。婆羅門即梵天名也。此類人自云。我本始祖。從梵天口生。故取梵名爲姓。と有をも思べし。但今引文等。婆羅門自云。此類人自云。かど云ると。趣意ある言なり。

さて私志記。婆羅門亦云。梵志。此云淨行。亦云淨志。亦云靜者。亦云靜胤。即修淨行之種姓也。とある淨行。淨志。靜者。其行を以て云。靜胤とい種姓より言。梵志と。梵の西語を其隨用て。梵行。志ぬ者の義。淨志と云。同。然は淨又靜の梵と云。婆羅門と云。當りて。行。志者かとい。義を以て添たる語なり。

上引音義。義云。承習大法者。と有をも思合べし。然は諸書

一。梵を淨。靜。潔。高淨。清淨。寂靜。など譯る。皆能當と。此外一言。痛理を以て譯る。皆當と知べし。

さて其淨行を修とい。何なる事をか云と考る。即其高祖梵天の傳たる。天乘靜淨の道を修る由なり。其趣。大般若經音義。婆羅門梵語。即梵天名也。唐云淨行。或云梵行。此類人自云。我本始祖。從梵天口生。便取梵名爲姓。世々相傳。學四圍陀經論。皆博識多才。明閑衆論。多爲王者師傅。高道不仕。或求仙養壽。時有證五通仙者也。と云。金光明最勝王經音義。世業相傳。習四圍陀論。皆博學多智。守志貞白。文儒雅操。高道不仕。其中聰俊穎達者。多爲王者師。受封邑而自居。最爲上等也。と有りて知べし。

又六波羅密多經音義にも。婆羅門唐云淨行。精持潔志。學四圍陀。博識多聞。爲王者師傅。高道不仕。彼國人民。多認此族爲祖也。



とも云り。

斯、先祖の正貴。其相傳、る世業の。高勝なるが故。國中の人舉て。此を尊奉しつゝ、遂に總國の號よさへ。負る事との成來となり。然るを佛祖世よ出。其新墾道を弘るよ就ての。思旨有て。此種姓。及其淨行をさへよ。甚詈卑たる説等起り。其義の。下の品々よ。次々論、を見て辨、べし。

玄道云。なほ五印度の境よ風俗等の事を委説たるを本書よ因て見べし。○二卷よ四姓を説たる婆羅門條を序なれば此よ抄出つ。

善見律よ。常修淨行。博學多聞高貴人也。大涅槃經音義よ。婆羅門謂淨行。高貴捨惡法之人。博學多聞者也。など見。上にも引たり。唐の義淨三藏が。寄歸内法傳よ。五天之地。皆以婆羅門爲貴勝。凡

有座席並。不與餘三姓同行。自外雜類故宜遠矣。と云。

文の意の。五天竺中よは。悉婆羅門を。最貴最勝の種俗として。座席よ會集する事ある時も。刹利。吠舍。首陀の三姓と。同席同行さへよせき。中よも刹利と。王種即此の如なれば。況三姓の外なる。雜姓の族類等の。遠て。近寄こと能きと云るかり。又西域記よ。摩竭陀國の條よ。伽耶城甚險固。少居人。唯婆羅門有。千餘家。大仙人之祚胤也。王所不臣。衆咸崇敬と云。事もあり。

上よ舉たる本文よも。印度種族。婆羅門特爲清貴。と云。を。玄并義淨共に。甚佛祖よ心醉せる徒なれば。若信よ佛説の如。刹利第一ならむよ。彼處よ渡て。親見聞せる二人が。右の如記む物のは。

又佛説の如は。殊よ國號よも負ま。ト。き物を。熟々思べし。さて初品よ引たる籍等よ。梵志等が説に。其先祖梵天の口より。



生出たりと云ふことを。佛祖は詐かりと言れど。上古より然る例何程もあり。既に其身も母が右脇の穴あき所より出たりと云ふ非や。

但斯云るは依て思は佛祖が其母の脇より生出たりと云ふとも。妄説よやと思由あり○玄道按ざるは。説鈴は載たる清人の迂略記にも。脇より生たる奇事有と覺たれど。此の實はても有なむか。

又彼引たる書等も。此類人自云我本始祖。從梵天口生。故取梵名云々。と様は記る。是又趣意ある言狀にて。他よりは然云ねども。自誇て云説ぞと云意を含まる語勢あり。然ども自言のみからき。國人擧て。然稱て尊重せる事。西域記。内法傳の記趣にて論なく。大毘婆沙論の大地所有。本是梵王神力。化作施諸婆羅門。今

婆羅門勢力羸弱。刹帝利等侵奪受用。とも見たり。

此の第百十六の十五葉は見たり。

然はこそ。佛祖が在世は在。婆羅門の趣を。阿含は據て察し。刹利王種の族さへに。其往來を見ても。大遷人。和尚上人。大師など稱て。尊崇頂禮せる趣も。著明に所知たれ。

又尊て世尊と云る事もあり。凡て是等の有來は梵志の稱號をば。佛祖皆取て。我を稱せしめたる故は。後に和尚上人。大師など云を。佛者に稱し。世尊と云は佛祖が事の如をも成にける。凡て佛法に用る諸號は更なり。此の難なしと見る限は。大抵婆羅門行より。竊るにぞ有ける。其の次々に辨を見べし。然は婆羅門種の起原を。世間に有ゆる。萬物家屬を毒刺として。寂靜を好。家を捨。山林に入る故に。婆羅門と稱せりと云る佛説



梵の静淨の義なるより思附て。例の翻案せる誣説造言なること。著明なり。

名義集に。普門疏云。劫初種族。山野自閑。故人以淨行稱之。肇云。秦言外意。云々とある説の類。總て佛祖の誣言に轉化せられたる説にて。論に足き。

然は。家族を毒刺とする。下に論如。外道に始る沙門行にて。佛祖が道の要旨にこそ有。婆羅門の本行に非をや。抑佛祖が此。誣説を發せる因縁。何にと考るに。刹利。吠舍。首陀の三種姓。謂ゆる劫初に。一時に。蟲の沸出る如。化生したるにて。刹利種の祖と云ども。其中なれば。猶卑。佛祖の其種族なる故に。彼梵志らが出。自を。世人の尊重するが妬。さに。右の如。誣言を發して。梵志の更なり。大梵王の古傳をも説破て。甚彼の神を卑。罵たる物なり。

然して世人の信。まどと思。妄説は。例として大梵王の語。又の故事などを作。設て。其證を引出。こと。阿含に數所見て。覺き獨笑る。事多り。

法苑珠林に。阿毘曇論を引て。大梵天者。異道人等。以爲能生。萬物之本。彼梵王亦計爲造化之主。如來欲破彼情見。故別標説爲有也と云る。即此の意趣なり。

彼四姓經。又世記經にも。右に引。刹利第一。波羅門第二の説を説訖て。梵天王頌曰。とて。生中刹利勝。能捨去種姓。明行成就者。世間爲第一と説て。我印可其言と云る。絶倒に堪ふる事にて。此の彼の大論に。衆生常識。梵天。以爲祖父。故説梵天と云る方便ありかし。

四姓經世記經等。長阿含中にあり。彼梵天王頌と云もの種



姓の議論あり。必論出る語にて。阿含中より甚煩迄。所々見ゆ。斯て仇を取る梵志等。時々種姓の耻辱を受る事を苦て。弟子比丘等。若人間種姓。我是沙門釋種子也。親從口生。從法化生。大梵名者。即如來。號如來。爲世間眼。爲世間智。爲世間法。爲世間梵。爲世間甘露。爲世間法主。と答べしと教て。種姓を擇む。其の法を信受奉行する者を。總トて釋子と稱する事を始て。利利第一。婆羅門第二の説を誣出せるなり。是をこそ。我慢の人と云べけれ。

○其婆羅門學四吠陀論舊曰毘陀訛也。一日壽。謂養生繕性醫方諸事。二日祠。謂享祭祈禱事火懺悔。三日平。

謂禮儀占卜兵法軍陣。四日術。謂異能伎數禁呪

符印。

吠陀の諸書は皮陀。韋陀。薜陀。圍陀。吠駄。鞞陀。達陀。毘陀。婆陀など記。何も其一を執りて。餘を訛と云り。今は孰を正とも定難。言義の蜜嚴經音義。吠陀梵語也。此譯云明論。謂壽祀平術。名四吠陀也。大涅槃經音義。四吠陀此云四明論。有十萬頌。西方所重。明四種法。一壽。二祠。三平。四術。と見。名義集は。吠陀此云智論。知此生智。即邪智論。亦翻無對とも言り。

即邪智論と云るは。佛者の例の貶言なり。大藏三藏の二法數も。此尻馬に乗て。即婆羅門之邪論也。以世間之智造養生等書。而有四種不同。故名四韋陀典。其書不曾傳至東土と云り。以世



間之智と云ると。佛法を出世法と自稱するに對して。吠陀を  
貶めたる語なり。

又衆經音義に。鞞陀此云分亦云知也。四名者。一名阿由。此云命。謂  
醫方諸事。

今標る本文に。壽とある體を命とあるに。譯の違なり。俱舍頌  
に。命根體即壽能持煥及識と云弘決一。一期曰壽。連持曰命。  
何よても宜。阿由を百論疏に。荷力と作大涅槃經義記。法華  
文句に。億力と作より共。阿由と同音なり。韻鏡を熟見む  
人の疑ト。

二名夜珠。謂祭祠也。

大涅槃經義記。法華文句など。二耶受とあり。然ば彼二法  
數に。珠夜とあるも。雜心論に。耶馴とあるも。共誤なり。

三名婆磨。此云等。謂禮義ト相音樂戰法諸事。

今本文に。平と云るを。等とあるに。是また譯の違よて。義の異  
あり。然て彼の二法數に。婆を婆と誤り。

四名阿闍。謂咒術也ともあり。

本書に闍字の下に。婆拏の二字あれと衍あり。そは百論疏に。  
阿闍とのみあり。雜心論。大涅槃經義記。法華文句共。阿陀と  
有はあり。

然て此四明論の起原を。六波羅蜜經十偈に。大梵演說四圍陀と  
云。

百論疏に。舊毘婆沙論を引て。大婆羅門。造皮陀論とあるは。大  
梵と云ふ同。其の梵と婆羅門と。同語あること。前云る如な  
ればなり。



大毘盧遮那經。住心品の。大自在天乃至天仙。大圍陀論師。各々應善供養。とある所の疏に。圍陀是梵王所演。四種明論。大圍陀論師。是受持彼經。能教授者。以能開示出欲之行。故。應歸依也。於彼部類之中。梵王猶如佛。四圍陀典。猶如十二部經。と見。

十二部經とは。佛法の本經と立たる經々なり。

共に大梵王の演説とせり。然るを摩登伽經。昔有人名爲梵天。修學禪道。有大知見。造一圍陀。流布教化。其後有仙。名曰白淨。出興于世。造四圍陀。一者讚誦。二者祭祀。三者歌詠。四者禳災。云々と言。金七十論。初從梵王。乃至仙人。說四圍陀。とも。聖教名聖言者。如梵天及摩菟王所說。四圍陀及證論。とも云。衆經音義。此四圍陀。是梵天所說。梵天孫毘耶婆仙人。又作八鞞陀。とも言り。

毘耶婆問經。此是仙人名。毘耶婆。造四圍陀。善知聲論。知種々書。と有は梵天の説る四鞞陀。又四鞞陀を加作る事を。作八鞞陀。と云り。此は佛祖と同時の人と聞たり。然は梵天孫とあるの孫裔の義と聞。まゝ大毘婆沙論。契經説古昔婆羅門造明論者。造咒術者。上首有十。一類瑟櫟迦。二婆莫迦。三婆莫提婆。四毘濕縛蜜多羅。五闍莫鐸者尼。六鶯者羅。七跋羅墮闍。八婆死瑟撓。九迦葉波。十勃栗瞿。如是等諸婆羅門。世雖尊敬。皆不度疑。而命終とも見。明論と云。即吠陀論なり。世と云。より末々佛者が例の他道を貶むる詞なり。

此を和會して稽る。四明論の原始。大梵王より出たるを。彼の天降る梵天子の人間に傳授せるを。

摩登伽經。昔有人名爲梵天。修學禪道。有大知見。造一圍陀。流布教化。とある是あり。



其後裔の梵志仙人等が。次々頌釋を作しつゝ。上下引書等  
よ云。如。十萬頌と云計。よ成よけむ。

其の摩登伽經よ。上よ引文の連次よ。次復更有。一婆羅門。名曰。  
弗沙。其弟子衆二十有五。於一圍陀。廣分別之。即便復爲二十五  
分。次復更有。一婆羅門。名曰。鸚鵡。變一圍陀爲十八。次復更有。一  
婆羅門。名曰。善道。其弟子衆二十有一。亦變一圍陀爲二十一分。  
次復更有。一婆羅門。名曰。鳩求。變一圍陀。以爲二分。二變爲四。四  
變爲八。八變爲十。如是展轉。凡千二百十六種と云るよても次  
々よ多。成以來よこと。推量れより。然ども十萬頌と云るよ。佛  
籍の例の定數よて。信ぎるよ足。ぎ其の下よ論。如。書と云は。  
十萬頌といふ口僻なればあり。

さて俱舍頌。遁隣記よ。四吠陀論。梵天所說可十萬頌。口相傳授不

書紙葉と云。

俱舍頌慧暉鈔も。これよ同。

寄歸内法傳の。西方學法と云條よ。五天之地。婆羅門所貴。典誥有。  
四藥陀書。可十萬頌。薛陀。是明解義也。咸悉口相傳授。而不書之。紙  
葉。每有聰明。婆羅門。誦斯十萬。即如西方。相承有學聰明法。一謂生  
覆審智。二則字母安神。旬月之間。思若泉涌。一聞便領。無假再談。親  
觀其人。固非虛耳とあり。

なほ東印度にて。其人を觀たる其趣を記れと。今漏つ。然よ  
ても。其聰明法を載さるよ。最も遺憾き事なり。大毘娑沙論十  
二卷。記憶の事を論むる所よ。曾聞有。婆羅門子。先誦四吠陀論。  
書。中間忘失。復溫誦之。盡斯方便。不能通利。便往師所。具述因緣。  
師即問言。汝先誦之時。以何加行。答言。本時手繩口誦。師言。汝當



如<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>。彼<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>師<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>。一切<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>憶<sub>レ</sub>。と云<sub>レ</sub>。こと見<sub>レ</sub>。ま<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>比<sub>レ</sub>丘<sub>レ</sub>が。一<sub>レ</sub>苾<sub>レ</sub>芻<sub>レ</sub>。記憶<sub>レ</sub>の法<sub>レ</sub>を教<sub>レ</sub>。さる事<sub>レ</sub>も見<sub>レ</sub>。

抑<sub>レ</sub>印<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>。ま<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>。云<sub>レ</sub>。如<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>梵<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>より傳授<sub>レ</sub>せる文字<sub>レ</sub>と。元<sub>レ</sub>より有<sub>レ</sub>。つ<sub>レ</sub>も。劫<sub>レ</sub>初<sub>レ</sub>。梵<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>の口<sub>レ</sub>づから頌<sub>レ</sub>して。傳授<sub>レ</sub>しけむ故<sub>レ</sub>。婆<sub>レ</sub>羅<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>の世<sub>レ</sub>。其<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>を固<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>て。紙<sub>レ</sub>葉<sub>レ</sub>。書<sub>レ</sub>ぎ。義<sub>レ</sub>淨<sub>レ</sub>比<sub>レ</sub>丘<sub>レ</sub>が渡<sub>レ</sub>る頃<sub>レ</sub>まで。幾<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>をか經<sub>レ</sub>けむ。其<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>を咸<sub>レ</sub>悉<sub>レ</sub>く口<sub>レ</sub>づから授受<sub>レ</sub>し來<sub>レ</sub>る。敦<sub>レ</sub>厯<sub>レ</sub>純<sub>レ</sub>固<sub>レ</sub>なる風俗<sub>レ</sub>。わが神<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>。元<sub>レ</sub>より文字<sub>レ</sub>と有<sub>レ</sub>。ながら。委<sub>レ</sub>曲<sub>レ</sub>と記<sub>レ</sub>ぎ。貴<sub>レ</sub>賤<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>口<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>。前<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>。といふ古<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>。思<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>れて。且<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>ぎ筆<sub>レ</sub>のさ<sub>レ</sub>し措<sub>レ</sub>れて。天<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>の如<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>こそ在<sub>レ</sub>けれと。潭<sub>レ</sub>感<sub>レ</sub>悟<sub>レ</sub>をぞ極<sub>レ</sub>さる。

大<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>廢<sub>レ</sub>て仁<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>の名<sub>レ</sub>あり。大<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>廢<sub>レ</sub>て文<sub>レ</sub>句<sub>レ</sub>の書<sub>レ</sub>あり。此<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>か深<sub>レ</sub>も思<sub>レ</sub>ひ悟<sub>レ</sub>る事<sub>レ</sub>の旨<sub>レ</sub>趣<sub>レ</sub>と。今<sub>レ</sub>述<sub>レ</sub>むとそれと。言<sub>レ</sub>を盡<sub>レ</sub>ぎ。設<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>さらむも。中<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>の意<sub>レ</sub>を盡<sub>レ</sub>べくも非<sub>レ</sub>されは。殊<sub>レ</sub>惜<sub>レ</sub>ながら。啞<sub>レ</sub>の如<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>。

ま<sub>レ</sub>の筆<sub>レ</sub>をさ<sub>レ</sub>し置<sub>レ</sub>まなむ。誠<sub>レ</sub>やかの佛<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>も。此<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>のま<sub>レ</sub>く。元<sub>レ</sub>と紙<sub>レ</sub>葉<sub>レ</sub>に書<sub>レ</sub>ぎ。口<sub>レ</sub>々に授受<sub>レ</sub>し來<sub>レ</sub>るを。其<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>を去<sub>レ</sub>こと三<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>より。紙<sub>レ</sub>葉<sub>レ</sub>に書<sub>レ</sub>ぎこと始<sub>レ</sub>て。其<sub>レ</sub>より大<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>の浮<sub>レ</sub>華<sub>レ</sub>競<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>て。好<sub>レ</sub>も惡<sub>レ</sub>も。佛<sub>レ</sub>祖<sub>レ</sub>の說<sub>レ</sub>の眞<sub>レ</sub>面目<sub>レ</sub>をば。搔<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>てぞ在<sub>レ</sub>ける。

ろく口<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>。授受<sub>レ</sub>し來<sub>レ</sub>る故<sub>レ</sub>こそ。纒<sub>レ</sub>ま名<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>。紙<sub>レ</sub>葉<sub>レ</sub>。記<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>たれど。其<sub>レ</sub>すら下<sub>レ</sub>校<sub>レ</sub>て辨<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>。彼<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>互<sub>レ</sub>漏<sub>レ</sub>たる事<sub>レ</sub>。また參<sub>レ</sub>差<sub>レ</sub>せる事<sub>レ</sub>も有<sub>レ</sub>なれ。

然<sub>レ</sub>は在<sub>レ</sub>と。總<sub>レ</sub>べて古<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>の正<sub>レ</sub>き事<sub>レ</sub>の種<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>。訛<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>つる中<sub>レ</sub>。ま<sub>レ</sub>の文<sub>レ</sub>籍<sub>レ</sub>。載<sub>レ</sub>て。無<sub>レ</sub>朽<sub>レ</sub>なる。勝<sub>レ</sub>て。深<sub>レ</sub>幽<sub>レ</sub>なる味<sub>レ</sub>の存<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>こと。眞<sub>レ</sub>の古<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>。精密<sub>レ</sub>ならむ人<sub>レ</sub>の自<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>なむ物<sub>レ</sub>ぞ。

さて百<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>疏<sub>レ</sub>。摩<sub>レ</sub>醯<sub>レ</sub>首<sub>レ</sub>羅<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>十六<sub>レ</sub>諦<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>。と云<sub>レ</sub>。ことあり。

摩<sub>レ</sub>醯<sub>レ</sub>首<sub>レ</sub>羅<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>の。大<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>と翻<sub>レ</sub>して。大<sub>レ</sub>梵<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>の。荒<sub>レ</sub>魂<sub>レ</sub>の名<sub>レ</sub>と聞<sub>レ</sub>る



こと。前卷に説るが如し。

其の説一。一量諦。二所量。三疑。四用。五譬喩。六悉檀。七語言分別。八思擇。九決。十論議。十一脩諸義。十二壞義。十三自證。十四難々。十五諍論。十六墮負とあり。此を大自在天の所説と云ふこと。全は信難けれど。中には。然も有む。と覺る義の無し。も非されは。若くは四明論中の説の。殘る物かと捨難。殊し。下論。迦毘羅仙が。二十五諦。優樓佉仙が六諦。勤娑婆仙が十六諦。佛祖が四諦など。總て諦さふ説の原なれば。因し。此し。擧たるなり。

但、右の文より。引放て。別し。此を釋せる説あれど。多し。金七十論の説を取て。附會せるにて。右の諦義し。背る説なれば。探ぎ。其の悉檀とい。謂ゆる悉曇字母の事なるを。自對義由異他義。如數人根是實法。論明根是假名等也。と釋せる一。をもても辨べし。○此に壽と云。釋あるを今略す。

二曰。祠。謂。享祭祈禱。の。百論。疏に明善道法と云。大涅槃經義記に。一。謂。事火懺悔。二。謂。布施祠祀。とあり。

衆經の音義に。只に祭祠とのみあり。

二。謂。も。本文と同て。互の精麁のとなれど。一。謂。事火懺悔。の。此も祠吠陀あるを誤て。壽吠陀と爲て。一。謂。とは言るなり。

かの紙葉し載ぎ。口づから傳る法なる故し。かばかりの違。と有なめり。

故。茲し。是をも和會して解むし。享祭は。神を祭事なり。祈禱の神し。禱事なり。其の懺悔と事火とを專一と爲て。犯る罪過。まゝ其穢惡を。禊祓する事を懺悔と稱し。事火法を修して。衆し。布施を行。其法をさして。善道法とは言り。



然、は祠、吠陀を第一と立、べき道理なる。第二と爲、さるゝ左、  
するも右、するも。壽命長久。身體壯實ならせり。神、事、るこ、  
と。長久成、難、故、。壽、吠陀を第一と立、まづ是より學、始、て。祠、吠、  
陀をば第二とい、立、さるゝや。事、の勢、然、も有、べき事ありかし。  
さて懺悔と云、の。禊、祓の事なる由、の。提、婆論師が百論。異、道の、  
行法を議、せる所、。求、那諦中、日、三、洗、再、供、養、火、等、和、合、生、神、分、善、  
法、とある。

求、那諦とて。第、〇、節、論、優、樓、佉、仙が六諦中の一なり。然、とも、  
此、法、の。本、疑、なく。吠、陀中より取、るなり。

其、疏、。外、道、謂、恒、河、是、吉、河、入、中、洗、者、便、得、罪、滅、彼、見、上、古、聖、人、入、  
中、洗、浴、便、成、聖、道、故、就、朝、暝、及、日、中、三、時、洗、也、三、洗、明、滅、罪、再、供、養、  
火、爲、欲、生、福、と、言、。

恒、河とは。謂、ゆる印度四大河の一なり。上古、聖、人とは。上古、  
在、し。婆、羅、門の聖、人なり。其、聖、人の、か爲、たるを。見、習、て行、由、  
なれば。是、また彼、始、て天、降、て。人、間を化、せりと云、。初、祖の梵、天、  
なるべく所、思、。

また和、合、生、神、分、善、法、者、明、崇、日、三、洗、以、除、罪、再、供、養、火、以、生、福、罪、  
滅、福、生、與、神、和、合、但、神、爲、主、善、依、神、生、故、言、生、神、分、善、然、神、具、生、善、  
惡、とも言、り。

此、引、二、文、共、に。程、能、切、て舉、されは。委、く、の。本、書を見、べし。  
日、一、河、中、入、て三、洗、すること。即、謂、ゆる懺、悔、して。其、の。明、崇、と、  
あれば。神、の。崇、ある事を知、明、て。其、罪、犯を悔、除、む爲、し。身、滌、かれ、  
は。皇、道、の。禊、祓、の。神、事と異、なし。

大、論、に。此、法を難、破、して。河、水、既、洗、罪、亦、應、洗、福、也、と余、一、物、知、



ぬ論よて。云よも足ぞ。

借一か滅罪し畢て後よ。事火法を修すれば福を生き。罪滅し福  
生じるの。即神と和合するなり。神の即主たり。善事の神に依て  
生じる故よ。神の分善と云。然ども。神の善惡を具生する故よ。罪  
犯あれば。崇をも行と云るなり。

熟々心を著て。味見べし。甚よくも。我が古道の古意よ符る説  
かりかし。

さて事火法のこととは。方便心論よ。事火有四法。一辰朝禮敬。二殺  
生祭祀。三燃衆香木。四獻諸油燈と見。百論疏よ。智度論を引て。外  
道謂火是天口。正燒蘇等十八種。令香氣上達諸天。天得食之。令人  
獲福。將欲燒時。前遣人咒。然後燒とあり。

また外道。謂火是天口。故就朝暝。二時再供養火。何故火爲天口。  
耶。俱舍論云。有天從火中出。語言諸天口中。有光明是火。故云天  
口とも云り。火を天口と稱事。本これあり。

今此を和會して考るに。一辰朝敬禮とのみ言て。火を用る事を  
云されは。本の唯よ大梵王よ事。る事を。事火と言るなり。然思合  
る。事の。長阿含典尊經の寓誕に。大梵王の説とて。往昔大典尊  
と云し。梵志の。大梵王を祭る事を説る由よて。大典尊謂諸先宿  
言。於夏四月。閑居靜處。修四無量者。梵天則下。與共相見。今我修之。  
使梵天下。與共相見。即修其法。以十五日月滿時。出其靜室。於露地  
坐。々未久頃。有大光現。梵天王即化爲童子。在虛空上。有頭五角。髻  
典尊見已。即曰。何天梵童子。曰。我梵童子。餘人謂我祀祠火神。と有  
よて知べし。

この文を甚約て引たり。



凡ての事實の。佛祖が寓言おれども。祭祀せる趣。また大梵王を梵童子と言。火神と云るなど。皆實事なり。

但、火神とは稱ども。火を掌神と云、よの非、火行を爲て。祭る神なる故。火神との稱と聞たり。尸棄と云、名を。火とも譯する。是の故なり。弊宿經。奉事火神とも。事火梵志ともあり。○或人間かの典尊經を。寓言と云、よの何を以て知る。答、彼經の趣意の。我と我が法を。最無上の法との。常は説つゝも。猶信ざる人の多るを。面向むとして。一時耆闍屈山に在住せる時。初利天の執樂神。般遮翼子と云、者。夜靜にして。無人の時。佛祖が許へ來て。初利天へ。梵天王至て。帝釋及。四天王など共に。佛祖の法徳を種々賛たる事を。我親く聞、よりと語る由なるが。中に。此、典尊と云、者の故事を作、入て。大梵王自、典尊を

化して。鬚髮を剃除し。出家せしめたるが。即今の釋迦如來なりと。大梵王の語を聞たり。實に然、やと問、よかは。佛信に其説の如、よて。なほ其、法徳を述、よかは。般遮翼が。其佛説を聞て。歡喜奉行せりと寓り。大梵王の意の。上よも。下よも論、如。佛祖が法との反對なれば。比丘法を勸べき由おし。初利天また帝釋の事。次品は論、如、おれば。佛祖の時分など。よ。さる事の有べき由なく。然、は般遮翼と云、執樂神の來て。云々と言、よ。妄作妄誕あるよと著、故、夜靜無人時。來りとの云り。凡て四阿含に。諸天鬼神などの來て。云々の事有、よと説、よること。計、よるに暇あらき見、よたるが大抵夜靜無人の時とあるの。皆寓言ありと知、よべし。典尊經の次ある。遮尼沙經も是あり。是を以て。餘人も皆嘗、知、よざるなり。中に。餘人も見、よはかり。諸天鬼神などを現



したる條々も有と其と神通と稱する術をもて。權現せるに  
て。實物からき其由と。第〇品に委く辨るを見て知べし。是等  
の事ども。阿含のなほ。其妄説の趣うひくしきを。大乘と稱そ  
る諸經の妄説の。次々に精巧なる故に。味者の皆信受奉行を  
めれど。活眼なるの誰か信せむ。

佛祖が毎に言出る頌に。祭祀火爲上。諷誦頌爲上。人中王爲上。衆  
流海爲上。星中月爲上。光明日爲上。天及世間人。唯佛爲最上。欲求  
大福者。當供養三佛と云て。大梵王に事るを祭祀の上と爲さる  
を以て。佛祖が當時の趣をも想像すべし。

右の頌句。こゝに。斯はあり長文を用無れど。次々の論辨に  
用る所ある故に。筆の序に標り。中阿含四十一卷に。此咒を  
咒火第一齋。通音諸音。本。王爲人中尊。海爲江河。長月爲星中明。

明照無過日。上下維諸方。及一切世間從人乃至天。唯佛最第一  
とあり。

さて衆香木を燃。諸油燈を獻。享祭せる種々の供物を焼て。香  
氣を天に上達せしむれば。天神そを食すと云こと。微旨ある事  
に覺るの。是また彼梵天より傳授せる法あること著。

衆香木を燃の。其香をもて。穢氣を避むとの意と通れば。我が  
古道の神事に。花賢木を獻に。意はへ似たり。諸油燈を捧る事  
と合て。火處燒の意はへ有。唯供物を燒こと。我が古道に例無  
れど。神の惣て。其供物の氣味をのみ享給かれは。其を燒こと  
も微旨有て覺るなり。心を平にして熟思すべし。偕火に事る  
と云こと。男のみ行るかと思に。雜阿含四卷に。佛弟子淨天と  
云。一者の母の事を。年老在中堂持食。祀火求生。梵天とあり然



は女も行けり。

かくて火の穢を忌。其淨不淨を重論せること。謂ゆる蜜經とも。また儀軌と稱せる籍等以多見。是みな梵志の古法の存傳る論にて。我が古意に符ること言も更なり。彼謂ゆる護摩ちふ法も。此火法を弘て。諸法に用たるなり。

その六波羅密多經音義に。護摩法。梵語。唐云。火祭祀法。爲饗祭賢聖之物。火中焚燎。如祭四郊五岳等。と有にて知べし。但謂ゆる儀軌に多る護摩法に。謂ゆる事火外道など云。徒の己が向々作りと見る法の多て。中への供物ならぬ種々の不淨物など。取集て焼こと有。忌々しき事なり。其に此に委く辨べくも非されば漏つ。

さて殺生祭祀と云。こと提婆論にも。婆羅門の古説を載て。那羅延天。從臍生。梵天。梵天爲衆生祖。大地是其戒場。一切衆生。於此場上。殺生祀天。皆生彼天とあり。

此文なほ長を今約て引たり。

此を上論事火懺悔と合て考るに。大地も衆生の戒場たりと言を思は。人種の本世の天界なるを。此世界へは。大梵王の警戒を。修行し果むが爲に生來つれば。此世界の。人種の本世を。戒場の寓世ぞと云傳にて。其警戒を犯過事のあるを懺悔し。事火行をも行と知れたり。

是よくも。我古道に意に符り。されど此の生々なる古學者らが曾も知ざる説あれば。己が今かく云を。不審思も有べけれど。古史傳に註きは。今更に云。佛説を記る書ともにも。此世を寓世と説るもある。梵志の古説を盗るなること言も更



あり

さて殺生祀天との百論に謂ゆる。馬祀の事と聞たり。然る其疏に。作馬祀者。衆生初起稟於妙氣。得妙四大。則生常天。若稟麁氣。得鹿四大。則生人中。爲求常天。故修馬祀。取一白馬。放之百日。

或云三年

尋其足迹。以布黃金。用施一切。然後取馬殺之。當殺馬時。唱言。婆藪殺汝。馬因祀殺。亦得生天。と有にて知べし。

文義の。人の生る初起に。妙氣をうけ。妙四大を結て生得たる。死して常天に生るも。麁氣をうけ。鹿四大を結て生得たる。再人中に生する故に。常天に生む事を求て馬祀を修すと云るなり。妙氣。妙四大。麁氣。鹿四大の説。信に妙なり。實にも人の稟賦に。此差別あり。此の道の精微に思を潭む人の。自然に悟得つべき事ありかし。

此の吠陀論中の法にて。常天とは。大梵天界を云り。さて梵志等が祭祀を嚴重に執行に就て考るに。十二天餞軌に。思合る事あり。其文に一切衆生。四大遠變。有種種々。病。或鬼魅來。作種種々。病。迷倒。世間。内外種々。損害。謂諸衆生不知恩。故有如是違。以何爲恩。謂地水火風。四大種有。其精。日月諸天皆有。内外養育之恩。供養此天。有種種々。利器。器界。生界。皆悉。増力也。其數幾何。謂彼天數有。十二也。地天。水天。火天。風天。大梵天。伊邪那天。帝釋天。毘沙門天。羅刹天。日天。月天。焰摩天也。如是諸天。何時歡喜。何時瞋怒。謂諸國王及諸人民。以非治世。作不善業。而捨正法。爾時諸天皆生愁憂。愁憂即過。便生瞋怒。若止惡業。以正治世。諸天歡喜。皆悉來護。

愁憂過て瞋怒を生きと云。こと。中にも珍く感たき説なり。國



を治む人など。殊に味べき説にこそ

若人<sub>レ</sub>了知<sub>レ</sub>如是<sub>レ</sub>諸天<sub>ニ</sub>。以<sub>レ</sub>財施<sub>ニ</sub>。嚴<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>生身<sub>ニ</sub>。後<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>法施<sub>ニ</sub>。顯<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>法身<sub>ニ</sub>。兼<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>慈<sub>ニ</sub>。悲<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>殺<sub>ニ</sub>生命<sub>ニ</sub>。以<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>供養<sub>ニ</sub>。爲<sub>レ</sub>報<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>恩<sub>ニ</sub>也。

斯の如。諸天の事實を了知して。しかく行こと。上の典尊經に謂ゆる。四無量なるが。然して生命を殺と云こと。由なく生命を殺を。警たる語と聞。また案に此。餞軌の。後に佛者の手を經たる物かれ。は此等の文の。例の撓入ならむも亦知べらる。せ。

世有<sub>レ</sub>諸天鬼神<sub>ニ</sub>。其<sub>レ</sub>數甚多<sub>ニ</sub>。何<sub>レ</sub>唯<sub>レ</sub>供養<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>十二天<sub>ニ</sub>。安<sub>レ</sub>立<sub>ニ</sub>國土<sub>ニ</sub>。萬<sub>レ</sub>姓安樂<sub>ニ</sub>。謂<sub>ニ</sub>十二天<sub>ニ</sub>。總<sub>レ</sub>攝<sub>ニ</sub>天龍<sub>ニ</sub>。鬼神<sub>ニ</sub>。星宿<sub>ニ</sub>。冥官<sub>ニ</sub>。是<sub>レ</sub>故<sub>ニ</sub>。供養<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>十二天<sub>ニ</sub>。即<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>一切<sub>ニ</sub>天龍等<sub>ニ</sub>護<sub>ニ</sub>也とあり。

以上。此にほとよく文を引切て。擧たれば委く。本書に就て見べし。此儀軌の。疑なく。祠吠陀中の古説あるを。竊て佛説に託せる物なる由。既に辨たりき。

天神地祇の情狀。また其功德を述釋たる趣を。熟々察するに。信に説得て。こが古道の正規格を以て律せむにも亦少か間然する事なし。故今こゝに。此諸天の事を悉擧て。説まく欲すれど。大梵天。伊邪那天の事。既に上より顯し。猶下より言れば。此二天を除。また帝釋天より以下。六天の事も。次品に。其事の出る所々を説むが。便宜けきは此に。四大精天の事のみを解明べし。

○以下闕文あり。

三曰。平。謂<sub>ニ</sub>禮儀<sub>ニ</sub>。占<sub>ニ</sub>卜<sub>ニ</sub>。兵<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>。軍<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>。百<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>。疏<sub>ニ</sub>に<sub>三</sub>明<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>塵<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>。謂<sub>ニ</sub>一切<sub>ニ</sub>婚<sub>ニ</sub>嫁<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>と見。衆<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>音<sub>ニ</sub>義<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>。謂<sub>ニ</sub>禮儀<sub>ニ</sub>。卜<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>。音<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>。戰<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>。諸<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>とあり。摩<sub>ニ</sub>登<sub>ニ</sub>伽<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>よ<sub>レ</sub>。三<sub>ニ</sub>歌<sub>ニ</sub>詠<sub>ニ</sub>とのみ言り。今是を和會して解むに。禮



儀と云は。應對進退の禮節。また西戎籍コノフと謂ゆる。射御音樂冠婚葬祭などの事をも明る故。或は婚嫁欲樂の事と云。或は歌詠とも。音樂とも云るなるべし。

婚嫁の禮を。欲塵の事とし。欲樂の事あと云るは佛者の記る籍なればなり。

占卜の事。いふは行けむ。梵志仙人などの。卜相せる事實の數見たれども。其法を知べき由あり。

案。古。娑羅門らが傳たる卜法。決して龜卜カメに似たる法なりけむ。この後考出る人必有べし。大毘婆娑論オホヒバサ。問諸占夢書。誰之所造。答仙人所造。彼由宿住隨念。智力。憶念。本事。而造此書。と云。事もあり。さて兵法は。何ナニまれ兵器を用る術なり。

四。日。術。謂。異能。伎數。禁咒。鑿方。百論。疏。明咒術。竿數等法。と見。摩登伽經に。四禳災とあり。鑿方は既に。壽吠陀に言れば。其餘を和會して解むに異能伎の事は。前節に。二。日。巧明。伎術機關。とある所に言る如。人の異に思慮オモヒカガて。工出ウデる種々の伎能なり。數とは。謂ゆる竿數の術にて。曆數をも込コめて云り。

前節五明の處に。曆數とあるにて知べし。禁咒は。五明の處に。咒禁閑邪とあり。咒して妖災病邪を禁むる術ある故に。閑邪ヒラシと云。禳災とも言りと聞。

但。大涅槃經の義記に。四和解違諍ヒトツとあるは。甚違ヒサシて。此に和會して解がたし。後人なほ考べし。さて數とい。竿數曆術の事あるに就て案に。曆術は。天地間に流行する造化の機運を豫ヒに測量して知法チかれは。謂ゆる天文學を本なる抑。印度より。此術の起る原始を稽ヒるに。宿曜經に。上古



白博又。二月春分。朔千時。曜躔。婁。道齊。景正。日中。氣和。梵天歎喜。命爲歲元。と有。古傳を據載たるにて。此の彼始て天降て。人間を化りと言。梵天の教始たる術にて。是も梵志の家學にぞ有ける。下に論。十八大經の六論中に。豎底沙論と云。釋天文地理竿數等法と有。四吠陀論ある。天文曆數法を釋せる籍なること著。また方便心論に。過去有那耶摩。明聞慧思慧。聞慧有八。一天文。二算數。三鑿方。四咒術。及四圍陀。是爲八ともあり。其の増壹阿含善知識品に。老梵志等が學事を稱する時に。看諸秘識。天文地理靡不貫博。書疏文字亦悉了知。諷誦一句五百言。大人之相亦復了知。事諸火神。日月星宿と云を以て辨べし。

長阿含經。梵志の學を稱するには。毎も七世以來父母真正。不爲他人之所經毀。三部舊典諷誦通利。種々經書皆能分別。亦

能善解。大人相法占候吉凶祭祀儀禮と云り。少の異あるも。是尤のたの常語なり。總トて。のる類の定語を考る。四阿含各々。その文例の定る。阿含經の諸經の中に。最第一に古と云とも。四經各々に。其記者の別なる故に。如此。此事はは第□□品。委く論を見べし。

さて此天文曆數測量の術。もと是梵天の所傳あるが。印度は傳。其より回々。胡國。唐我國に傳。漸々に西洋なる諸國にも傳。なほ次々に。精密かる測量法を出來にける。この佛國曆象編に委く論る如あるを。今行る西洋學の徒など。殊惜がりて。西洋の天文は。既入多國より始り。彼國の開闢甚古。三四千年許あるに。雲なく雨降。ざる國なる故に。天文を明るに便宜。精密なりなど言て。曆象編の説を破むと爲めれ



と。印度の開闢は五六千年よりも前なるべき事。下に論、如なれば。中々阨日多國などの及、所に非き。但、彼國邊。謂ゆる地中海の南邊なる島々の。雨降、せとも言は。天文に精、き道理は無にしも非き。されど。本、これ印度法を受、たるに因ること西洋曆ある星宿の名あとも印度の名を其儘に用、たるは印度より彼に傳、る證なれば。曆象編ある此説は。確乎として拔、かからせ。余が意思に。印度より西洋は傳、る事とも。天文曆術のみ。あからせ。文字の更、よも云、せ。醫方諸伎術謂ゆる窮理の學も何も。その本の。印度より傳授せるを彼國人らが次々に精密を加、たる物とこそ所思、れ然、れは西洋の諸國の印度より開闢せりと、言、ひも強説に非きと知、可、然、るを西洋人の却、て。印度説、の我が古説を盜、るなりと云、つとる竊人の猛々、さひ今に始、ぬ事なりとのし。

さて咒禁修法の事の。秘密儀軌と稱する籍等に。載、る法とも。大、凡、の佛祖に出、たる由に作、成、れど。其、みな寓託の説よて。實、よの悉、梵志、まゝ彼、外道の修法を竊、るにて。一法も佛祖が眞法に有、ことなし。斯、言、ふ由、の。長阿含起世經に。佛告、比丘、若有、衆生、奉、持龍戒、心意向、龍、具、龍法者、即、生、龍中、持、金翅鳥、戒及、法者、持、兔、臬、戒及、法者、各、墮、其中、或、持、狗、戒、或、持、牛、戒、或、持、鹿、戒。

俱舍、遁、麟、記、よ。以、外道、通、不、了、八萬劫前、之事、不知、狗、牛、過、去、有、順、後、世、天、業、但、見、狗、牛、死、得、生、天、便、謂、食、草、噉、糞、是、生、天、之、因、故、以、効、之、名、狗、牛、禁、故、本論、説、有、諸、外道、起、如、是、行、見、立、如、是、行、論、受、持、牛、戒、鹿、戒、狗、戒、とあり。

或、持、瘧、戒、或、持、摩、尼、婆、陀、戒、或、持、火、戒、或、持、月、戒、或、持、日、戒、或、持、水



戒。或持。供養火戒。或持。苦行穢汚法。彼作。是念。我持。此功德。欲以生  
火。此是邪見。必趣二處。若生地獄。或墮地獄。俱舍道隣記に外道計  
恒河水能洗滌衆罪。謂爲福河。事火外道計。火能燒淨一切。故復投  
之。或投巖等。と云るを以て佛祖が甚修法を悪ること著明なり。  
日戒。月戒。水戒。火戒。大梵王に事する法をさへに。邪見と云るもの  
とや。

然るに密部の經軌どもに。金翅鳥王經。荼祇尼法。毘那耶迦法  
かご云。を始め。異類異形の物どもの傳授せりと云る修法の  
多るは。梵志の知。謂ゆる外道輩の修せる法と見るをも佛  
祖の印可と誣佛説とも稱せるなり。但彼儀軌中に諸佛法部。  
諸菩薩法部。諸明王金剛部かと云。部類を佛祖が物ならむと  
思ふも有らむか。然れと實に。釋迦を除て佛なく過去十方

の佛と云は。寓誕なれば。其修法の有べき由なく。また佛は修  
法など。有ては十號具足の位號に應むと菩薩と云も。觀音。  
普賢。文殊を始。大抵は有名無實にて。佛祖の都て名をさへし  
知ざるが多。況て其修法は更なり。皆後人の寓託なり。然と有  
と。其修法の本は梵志また外道輩の法を竊して佛法風よ作  
改たるよぞ有ける。其は本より。盜心を以て。然爲さるも多れ  
し。まゝ止事なき由緒も有けり。其の行智説。高僧傳なる洛  
陽朱士行傳。既至于闐果得梵書正本凡九十章。未發之頃于  
闐諸小乘學衆。遂以白王云。漢地沙門欲以婆羅門書惑亂正典。  
王爲地主。若不禁之。將斷大法。聾盲漢地王之咎也。王即不聽。貴  
經云々と有は。然る由緒よりて異道の書を佛説さまに書  
改て費歸るも多らむと云り信し。然れども千歲覆



べからき發露する事とも有て經々に就て逐一に糺明すれ  
ば元より佛法の物なるか否ざるかは最著明に知る事あり。  
おほ言は。阿含四經は。佛祖が在世生涯を記録せる籍あるは優  
波先那と云。比丘が尺計ある小蛇の身上に落たるに恐て。命  
死と泣喚ける時に。咒術の章句を授ふる事有と。此の一時の方  
便に爲つる事と見て。餘に咒術修法をも行する事は。都になまな  
り。

其咒術の章句と。鳩婆隸。鳩婆。鳩陸。捺捺。掃捺。掃。枳  
跋諦。文那移。三摩移。壇諦。尼羅枳羅施婆羅。拘閉鳩隸。鳩娛隸。悉  
波訶とあり。此を翻譯して見。決て佛祖より以前に在る咒  
文なる事をも知べけれど。其は今の用にも非されと漏つ。  
其は咒術修法と。神にまれ鬼にまれ。本尊とする物有て。行事か

る。其立たる法は。我を天。上天下の最尊と。自證自可せる法な  
る故。本尊と立べき物の無ればなり。

此は増一阿含品。佛告諸比丘。八部之衆。所謂。刹利衆。婆羅門。  
長者衆。沙門衆。四天王衆。三十三天衆。魔王衆。梵天衆。我至此衆  
中。共相問訊。言談講論。獨歩無侶。亦無疇匹。於中最尊。八部之衆。  
無能見頂。亦不敢瞻顏。何況當共論議乎。と云る。よても。自可自  
證の鼻高こと想像れり。

故その没後。迦葉。阿那律。阿難を始。聲聞の太弟子と。師が生  
涯の事實説法を結集せる。上座部の藏中。咒禁藏と云。はなく。  
上座部衆中を擯斥せられ。斗量の末徒らが。結集せる。大衆部  
は。咒禁藏をも収たれど。其は佛祖の本意は非せりと。然れば  
その大衆部の徒が。結集せる咒禁藏と云。は。梵志まゝ。外道等の



咒禁修法を竊て佛説に誣託せる藏あること疑なき物なり。  
かの大乘と稱する託説も。本は此大衆部の末派なる大天と  
云。比丘より權輿して次々大乘經説を偽作せるよて凡  
て佛祖が本法を小乗と貶る説も此大衆部の論師等よりぞ  
起ける。

さて後世これに倣て。次々異道法と竊して佛説に誣つ。儀  
軌類の籍とも多。出来る。其最後。大誣に誣するは。謂ゆる三部  
の密經。五部秘經など稱する經々なり。其證を言は彼經々の中  
に。專要とする。蘇悉地經眞言法品の。結頂髮眞言の所。眞言髮  
三遍。當頂作髻。若是比丘。右手作拳。舒大母指。屈指頭。押大指頭上。  
令頭指圓曲。眞言三遍。置印頂上。と有は。本これ有髮なる梵志の  
修せる法なるを。佛者に用るは。變法ある故。若是比丘云々と。

結髮印を作て。頂上置とは言ひ。佛説に誣託しつゝ。此は其  
羊皮を忘て。覺き其虎質を露顯せるなり。此經若實に佛説なら  
むよと。比丘相と主とし。若是有髮云々と。剃髮印を作て。頂上置  
とこそ言へけれ。

秘密部と稱する經軌。かゝる類の思辨べき事ども甚多。所  
見あれど。然し引出す事の煩ければ。餘は皆漏つ准て想像  
べし。

さて彼諸儀軌中。咒術修法を見通し。是ぞ梵志が修法の眞  
面目を。其儘に傳たりと覺る。一部も所見なき中。大梵王。ま  
ゝ其異名の神の修法咒文。また符印なども多。散在して見つべ  
き事も少らぎ。其が中にも。一字心咒。經に出たる。大轉輪王の一  
字咒と稱する咒文。もと決て梵天の傳授して大梵王の眞咒な







此のまゝに用かき妄説の長文を悉拾て妄誕ながらも。今の論に用ある文のみを採出たれば。悉の本經を見べし。斯て是より末の種々修法して。此咒を用る事を記れし。其の上云、如別に部類せる物有は此に云せ。

此に淨居天宮在てと云れし。此は佛祖が妄意設たる天名にて。然る天界の有ことあり。然れば其天なる諸天衆を集て。説たる趣作るも。妄誕あること言も更なり。

此の咒のこぞ。一字佛頂輪王經。一字奇特佛頂經。一字頂輪王經。かぞよも出。皆佛説と爲たるが。此心咒經を除て。餘經のみか。娜謨三漫多沒馱南。と云語を首付たり。斯て此四經の。もと一部の咒禁籍なるを。人々各々。佛祖誣て作り改たる故。別經の如成るあり。其の其説所をも。此の淨居天宮

と有。餘經の在。摩竭提國。菩提樹下。金剛道場。成正覺時。と云り。是を以て。後人の思思作改たる物あることを辨べし。諸天衆のこと。いかに妄ならせやも。

一大光の説。是また妄誕なること炳焉。大轉輪王頂三昧といふ。三昧の有べくも非せ。

總して四阿舍外なる經々。何三昧。某三昧とて多る。皆佛祖の知。さる三昧。中一の梵志異道などより出たりと見るも有。大凡の論師らが妄三昧ありと知べし。また其大光中より。聲を發して。と云るか。とを論も足。唯此文中に取べき事。大轉輪王の心咒と稱し。最上秘密心咒と云て其功德を敷演せる説のみなり。其の此心咒を佛頂よりといわれし。本來これ。大轉輪王の咒なる故。全佛咒なりとい。竊か



ぬて輪王と云、名の存たれど。佛説の如思取べく。佛頂大光の妄説を作。また其光物。佛を汝かと言しめて胡亂るなり。

凡て古説を竊して佛説とし古法を竊て佛法とせる趣の經々大抵此有狀あり心を著て讀辨べし。

抑大轉輪王と云、王のこと。阿含經の佛説は數所に見て。金輪聖王とも稱し過去の世は出謂ゆる須彌の四洲を治。金輪寶と云を始。七寶を持つるが。其王の四洲を巡見する時。彼輪寶れのれと轉て。王の前導する故は轉輪王と號る由を説たり。然れども其の妄誕にて。其實は前節論ふ。大梵自在天の大威力ありて。能當者なく。空行する時。輪ありて前導を爲と。有古説を例の翻案て作る説あり。

一字佛頂輪王經の。上は云。如もと此心咒經と同物を、別人の作、改たる物と見るが。彼經は。佛祖が大轉輪王に化て。説る由に作るが。其文は爾時如來變身相如大轉輪王具足七室。云々と云。大轉輪王坐於座上。身容赫變映照一切。如鎔金聚。即説咒曰。云々と有をも思可。正は。大梵王の狀と見。大轉輪王坐於座上と云。文より前。佛祖が變化たる説なごの後は。撻入たる説と。顯し見ゆり。雜含二十六は佛最勝處智。轉梵輪於大衆中。能師子吼而吼。といくつもあり。

斯て佛祖が始て説法せる事を。轉法輪と云よ。諸經論に見たるが。此をまた梵輪と轉せとも云を思は。元は梵王の前導する輪の自在に轉して。能く當者なきが如。其法を弘通するに譬たりけむを。其は就て。また彼説法の始は。大梵王の勸請せるを受て説たる故は。梵輪を轉せと云と言る。幻説をさへに翻案せり。



彼此會て考るゝ一字心咒の大轉輪王の。大梵王の異稱なること灼然り。

若此大轉輪を四洲を巡とふ王の事と強て思も有なむ。然れど其輪王のこと。四祖も妄説の爲とれど。大梵王より。甚劣る趣たるを。右の經々を作る徒の知ざるべき由無れば。彼輪王に非ぞ。大梵王なること著明なり。但一字心咒經は。大自在天那羅延天梵天とを別と出るの同神の異名ある事を知ざる故なり。

猶思會るゝ事の既と云る如。梵を正と。婆藍摩と。沒囉憾摩とも云を見よ。この歩林呼と云と同一。即梵天界の名を唱て。梵主の威稜を仰。且彼天界と生せむ事をも。祈願意の咒文と問るをや。

悉の對譯を奇特佛頂經の。歩林呼と見。一字心咒經の。部林と記。一字頂輪王經の。步嚕と見。一字佛頂輪王經の。勃琳舒とあり。皆同音吳譯あり。

然れば。儀軌ごもの修法と立たる本尊と更あり。現存する人よまれ。物よまれ。其方願事あるよは。一向其名を唱る法の多見とるは。是より始る法と聞。

まの佛法と於て。佛菩薩の名号を。一向と稱る事も。その修法と倣ふことは言も更なり。

かくて悉も。印度の咒文の祖とて。次々多成もて來つと見。中。四大天神の咒を始め。彼古風を觀べき咒文の。稀も存るも少らき。

その彼咒禁法を類聚せる物れ中と載れど。世と漏る時も



有なむかし。

偕かく註畢て。熟々觀は。西戎國は謂ゆる。道士の所業は太似  
たり。是を以て大圍陀論師の長老なるを。大仙人とぞ稱りけ  
る。

なほ支那の道士も後世に異説を生せしこと。また四吠陀  
論の外は十四論ありて。合て十八大經と云。事梵志の師道  
の天神より出たる由をも委く論れたり。

外道服飾紛雜異製。或衣孔雀羽尾。或飾鬘體瓔  
珞。或無服露形。或草板掩體。或拔髮斷髭。或蓬鬢  
椎髻。裳無定赤白不恒。

さて婆羅門の行法。及び四吠陀論此事は。上れ件々を解辨る

如なるが。此行法を本據として。別は門戸を立る。謂ゆる外道  
の諸流あり。抑外道とは。佛道の外なる諸道を佛法者より貶  
し云ふ語にて。儒道の外なる諸道を。漢學者より。左道と貶し  
云ふ同ト。

これ謂ゆる。尊内卑外の意はへよて。佛者はすべて。其道を  
内とし尊し。他道をは外とし貶して。我が書を内典と稱し。  
他道の書をは。外籙俗書など云り。されど其は。彼道の垣内  
からむ者こそあれ。他の道々より云へは佛道また外道な  
り。故金七十論よと。佛道を始め。他道を弘く。外道とせる意  
を以て。外曰と問答の文に記せり。但し此は。各々其道々の  
私を論ふなれど。本朝の古道より云。ときハ。儒佛の道は更  
かり。何道生まれ。天皇祖神の御道は差へる説の有。むは。悉



く外道邪道ふ非ざるの無ぞかし、是ぞ公平の議論なる、然れども、後世の佛籍とも、眞の婆羅門法をも、推こめて外道と言ふ。眞の佛語をよく稽へざる。古比丘らが過失を有りける。然るは、阿含經中より考ふる。外道梵志と云ひ。或は梵志外道とも云て、外道と梵志とを混せせ。

中阿含より外道と言へき所。多く異道といへり。其目易きを云ひ。增壹阿含牧牛品の佛説。梵志別有梵志之法。外道別有外道之法。と云へるを思ふべし。

また同品より羅闍城中有梵志名曰施羅備知諸術、外道異學、經籍所記、天文地理、靡不貫練、亦復教授、五百梵志童子、あるも梵志より對へて他道を外道異學と云り、また佛道を内とし、他道を外とせる事も、内經より觀近道異學、如觀空瓶、而

無所有、今察内法、如似蜜瓶、靡不甘美、とあり。此を始とや言べからむ、名義集より引く二教論より救形之教、稱爲外、濟神之典、號爲内、と云へるは附會なり、

佛祖も、他道を甚く貶しつゝ、婆羅門法をば、外道と言はせ。其法内にも入れず。別より一法とせり。其も佛祖の學は、もと謂ゆる外道より従ひて受たるなれど、其行法は、禪定を始め、何も婆羅門法を取りて、少く曰が新意を交へて建立し、其行とや、がて梵行と稱へれば、然すが祖法をば、甚く言腐し難き故なるか。

然るを阿含外なる、大乘と云ふ經論とも、其差別を辨へ、婆羅門をも、推こめて外道と稱し、殊より此學をいひ腐せる説等の多るは、佛祖が本意を知らざるなり、名義集より



婆羅門を、外道篇に出し、出定後語にも、外道に婆羅門を混  
トて論へるは、此よなき誤りと知べし。

支那比丘れみ。其佛意を知たりけむ。西域記には、其差別を、大  
概は文別たり。心を著て察るべし、其外道は迦毘羅仙と云。  
が始、よて。是最も久遠なり。輔行記に、迦毘羅此云、黃頭。頭面俱  
如金色。

名義集に、娑毘迦羅亦云、切毘羅。此云、金頭。或云、黃髮。と見  
ゆ

說經十萬偈。名僧法論と見え。百論疏に、僧法此云、制數論。明一  
切法。不出二十五諦。一切法攝入二十五諦中。故名爲制數論。  
名義集に、僧法正云、僧企耶。此云、數術。又翻數論といひ。百  
論音義にも、僧法訛也。應言僧企耶。此云、數也。其論以二十五

根爲宗。舊云、二十五諦と云ひ。大涅槃經普義に、迦毘羅論。古  
音云、黃頭仙人論也と有れば、僧法論とも云へり。異名同論  
なり。

二十五諦者。此論智度論。金七十論。俱舍論。涅槃經。闍提首那。並  
解釋之。今略和會序其綱要。

此論とは百論をいふ。此論疏の作者吉藏かく言へば、自  
其綱要を和會し得つと思ふ。元より言痛き論ある  
故。かほ綱と目と混雜して。其綱要を得難く。殊に佛者と  
もの記せるに、本人の立たる名目を。其方風の名に替へ。或  
其事を變トなとして。惑ひしき事ども多かり。其に五唯を  
五塵とし。男女二根と。大遺とい別あるを。大小二道かと云  
ひ。或は大小便道なと云て。其作用を省きたるなど。甚く本



人の意を背けり。故今金七十論を披き。なほ輔行記。因明論疏。名義集。大藏。三藏。の二法數など。合せ考へて。綱は其宜と  
き。從ひ。目は悉く金七十論の繁語を去て。目易きを摺  
して。左の如く記し。ま、他書を取て。目中記せる。其書  
名を云て別ちつ。然れども仍其旨趣の會得と難き狀なる  
元これ腐々しき論をきは何のせむ。只古き佛者どもの。  
此仙人が説を憎む餘り。其旨趣をよくも辨へぎ。謾に記  
せる。少る勝りて。有む。かくて金七十論。專と據る  
由は。彼論の。迦毘羅仙が説に據て。其末派の者の記せる論  
なればなり。

蓋此外道亦修禪定有五神通。知八萬劫內事。八萬劫外。眞然不能了知。故謂之二十五冥諦。

案ざる。禪定五神通は。元より婆羅門の古法なる故。此  
外道亦と云りと聞ゆ。知八萬劫內事と云ことは。此仙の妄  
想の妄誕なり。然してまた佛法。過去無數劫内の事を知  
り。未來無數劫の事をも知ると云は。此仙か妄誕に加上せ  
る。佛祖が妄誕なり。其も此事のみならず。其説法の骨と立  
たる。謂ゆる四諦十二因縁も。此二十五諦より。思ひ立たる  
説なり。そは未々記し辨を見て知るべし

一者神我能生諸法常住不壞。是二十五諦之主。故名爲主諦也。  
若我依此身。則有作用。若無我依者。身則不能作。五大聚名身。  
此身非自爲。必爲他。他者即是我。譬如牀席等。聚集非爲自用。  
必皆爲人設也。

二者自性。或名勝因。或名爲梵。此本有故。無所從生。有三德也。



三德者一樂。二苦。三癡也。覺等二十三。從自性出而皆有三德。故知本有三德。末不離本。故譬如黑衣。從黑纒出。末與本相似。神我與自性和合。能生於覺等二十三。譬如男女由兩和合。故得生子。若自性有者。不能生變異。以無伴故。譬如一人不能生子。一縷不生衣。自性亦如是。○二法數曰。八萬劫前。冥然不知。之。但見最初中陰初起。以宿命力。恒臆想。昧為自性。世間衆生。由冥初而有。即世門本性。故云。冥初自性也。○因明論疏云。八萬劫內。有覺知。八萬劫前。不覺號為冥性也。次自性先生覺。

或名大。或名智。或名想。覺有八分。四分為喜。四分為癡。喜分者。謂法與智。離欲及自在也。○法有二種。二種二種の五法あるなり其一種の五法の一者無瞋。恚。二恭敬師尊。三內外清淨。四減少飲食。五不放逸。又一種の有五

一不殺。二不盜。三實語。四梵行。五無諂曲。○智有內外二種。外智者。六皮陀也。一式又論。二毘迦羅論。三劫波論。四樹提論。五闍陀論。六尼祿多論。內智者。三德及我也。由外智得世間。由內智得解脫。○離欲有內外二種。外者於諸財物。已有三時。苦惱。謂覓時。守時。失時。故求出家。此因外智成。內者先得內智。已識我與三德異。故求出家。因外離欲。猶住生死。因內離欲。能得解脫。○自在有八種。一微細極隣虛。二輕妙極心神。三偏滿極虛空。四至得如所。意得。五世間之本主。一切處勝他。故六隨欲塵。一時能用。七不繫屬他。能令三世間衆生隨我運役。八隨意住。謂隨時隨處隨心得住。此四喜分。此名薩陞相。此相增長。能伏羅闍及多摩。多摩者。一非法。二非智。三愛欲。四不自在。此四癡分。是名多摩相也。○因明論疏云。薩陞此云有情。及勇健義。今



取勇健義。次刺闍此云微。亦云塵空。今取塵義。次答摩此云聞。聞純之聞。自性正名勇塵聞。三德者舊云樂苦癡。今名貪嗔癡也。

次從覺生我慢。

謂我聲。我觸。我色。我香。我福德。皆可愛。如是我所執名爲我慢。若覺中喜分及癡分增長。則生我慢。具如下說。

次從我慢生五唯。

謂一聲。二觸。三色。四味。五香。若覺中癡增長。則生我慢。能伏通喜。是癡爲我慢種。故聖說名大初。是我慢能生五唯也。

次從五唯生五大。

謂聲唯生空大。觸唯生風大。色唯生火大。味唯生水大。香唯生地大。我慢生五唯。五唯生五大。故五唯及五大。悉是癡種類也。

從五大生十一根。一五知根。

謂一耳。二皮。三眼。四舌。五鼻。此五名知根者。能取聲等五唯。故。

次五作根。

謂一舌。二手。三足。四男女根。五大遺。此五名作根者。皆與知根相應。作諸事故。舌能說名句。手能作巧捉。足能行高下。人根能生兒子。大遺能棄糞穢。故名之。

次心根也。

謂能分別爲心。心根有二種。分別是其體。云何如此。此心根若與知根相應。即名知根。若與作根相應。即名作根。何以故。是心根能分別知根事。及分別作根事故。譬如一人或名工巧。爲能說。心根亦如是。此心云何說爲根。與十根相似。十根從轉變我慢生。心根亦如是。與十根同事。十根所作事。心根亦同作。是故。



得根名。若覺中喜增長。則生我慢。能伏通癡。是喜爲我慢種。故聖說名轉變。是我慢能生十一根。云何如此。以喜多故。能執自塵。此十一名。薩捶相。是故謂三德轉異。能生十一根。而此十一根安置各異。誰之所爲。眼最居上。能看遠色。耳各一邊。能聞遠聲。鼻在一處。能取至到。香舌在口中。能取來到。味皮根在內外。至觸皆知。手居左右。而能執捉。足在下。分能行高下。二根居隱處。能生兒子。意根無定處。能行分別事。安置此諸根。是誰所作。非我非自在。自性爲正因。自性生三德及我慢。我慢隨我意轉。由此三德安置諸根。故覺以下七名變異。自性所作。故諸人知此二十五諦境。決定脫三苦。隨處隨道。髮髻剃頭。得解說無疑也。と有。

二十五諦と云、諦ハ諦審の義と諸書見右の二十五數ハ

義を諦審して知由の稱なり此を又二十五眞實とも二十  
五實智とも云り三苦の事と下に引文に見

さて輔行記を始諸書上の五大の所ニ此仙人が説を擧て  
謂五大即四大及空也此五種由五唯而生故云從五唯生五大  
地大藉塵多故其力最薄空大藉塵少故其力最強故五輪成世  
界空輪最下次風次火次水次地此就成世界五輪判之成肉身  
亦爾と有を思は古説の四大ハ空を加て五大と爲たるハ此  
仙が所爲トヤ

四大及空とあるも其義と聞たり

さて四皮陀中有諸仙人説如是言とて一切三世間初生微細  
身但有五唯此微細身生入胎中赤白和合增益細身是母六種  
飲食味浸潤資養增益羶身是母子飲食路一處相應故得資益



猶如樹根有容水路。此細身中。手足頭面腹背形量。人相具足。身亦如是。細身名內。麤身名爲外。と云。説を引。

此説ハ。然る理有て覺。信ハ四皮陀中の説ならむも知べからざ。

昔時。自性者。廻轉生世間。細身最初生。從。自性生。覺。從。覺生。我慢。從。我慢生。五唯。此。七名。細身。細身常住。若。麤身退沒時。細身若。與非法相應。則臨受生時。受四生。一。四足。二。飛行。三。育行。四。傍形。若。與法相應。則臨受生時。受四生。一。梵天。二。天。三。世主。四。人道。臨死。細身棄捨。麤身。此。麤身。父母所生。鳥獸噉食。或復爛壞。細身輪轉生死。と云り。

後の四生を。異所ハ。一。梵王生。二。天帝生。三。世主生とあり。然。ハ一。梵天とは。梵天界に生るを云。二。天とは。切利天界に

生るを云。三世主とは。此世の國界を治る主と。生る由と聞たり。偕この文は。本論の長文を殊ハ甚切て引たきは。心得なく見ては。本論に違りと思。人も有なむ。然。と本論を熟見む人は。疑なかる可。

此は四皮陀論の古説ハ。基たるには有と。自性と云。物ハ。尊重を結歸して。彼大梵自在天の神徳ハ。因とふ古説を破り。其は言。自在天爲因。是義不然。云何以无徳故。自在天无有三徳。是故自在不爲因。自性有三徳。世間有三徳。故知自性能爲因。と云るよて知べし。

三徳とは。樂苦癡を云。こと。既ハ上ハ註るが如。斯て自性と云るは。自然を云るハやと思。然。をハ一切世間自然爲因。と云。古説をも破て。是義不然。と云。きはなり。印度ハ古。



自然の説を唱へ者あり。そを無因論師と云り。其説に。世間無因而起。是實是常號曰自然。能生萬法。生一切物。なと云とぞ。唯識論疏。また其演秘など云。物は見たり

さて剃頭して。比丘相と爲を。解脱とする事も。此仙が始たる事なるを。上に引文。隨處隨道。髮髻剃頭。得解脱無疑也。と言るめて著明なり

豈大梵自在天の意ならむや。眞の梵志は然ざること。上は既論り。剃頭すること。眞の道は叶むには。初生より。髮の生てと生まどき物をや。

偕また。今當説未見法とて。其偈。最後由伽時。當有如是人。依邪見邪行。誹謗佛法僧。先邪化父母及朋友及眷屬。開四惡道路。將他入此中。と説。下文。如未來過去亦如是。とあるは。將來の

事を云るにて。是謂ゆる懸記の始なり。佛法僧は。佛法は謂ゆる三寶と異にして。百論疏に。迦毘羅謂佛寶。僧伽經謂法寶。弟子謂僧寶也。と云る如く。佛とは。迦毘羅仙を稱り。其ハ名義集に。佛陀。秦言知者。漢言覺。妙樂記云。此云知者覺者對迷名知對愚說覺とあるが正説にて。元より知覺ある人をいふ。彼國の古言かれはなり。

法華音義。佛梵云佛陀。此云覺者。此略去陀字。但云佛とあり。法とは。謂ゆる二十五諦法をいふ。僧とは略語にて。是も名義集。僧伽秦云衆。四人曰上。皆名衆とあるが正説にて。是また彼國の古言なれば。二十五諦法を信受する衆人を云り。比丘相。剃髮せる者をのこ云ふ稱の如。云る説等は後の



説にて。是また取。不足

然。佛祖が謂ゆる。佛てふ稱を此を襲。また法と比丘とを合。て。三寶と稱する事。此は倣。また彼事々しく言。喧。懸記と云。ことも。迦毘羅仙が妄を。眞似たる。よぞ有ける。よく思。可。佛祖新説を發すと云。とも。語までを新製す。ま。ト。ければ。必襲。所なくは有。べから。猶その襲。取る事。とも。次々。辨。を見。べし

さて此。迦毘羅仙と云。し者の。出。たる時。世は詳。なら。ぎ。金七十論の發端。昔。有。仙人。名。迦毘羅。從。空。而。生。自然。四德。一。法。二。慧。三。離欲。四。自在。總。四。爲。身。見。此。世。間。沈。沒。盲。闇。起。大。悲。心。咄。哉。生。死。在。盲。闇。中。遍。觀。世。間。見。一。婆。羅。門。姓。阿。修。利。千。年。一。祠。天。而。迦。毘。羅。在。虛。空。中。不。現。其。身。語。曰。汝。戲。世。間。法。耶。言。竟。即。去。

梵志の天を祠法を世間法と云り。是ぞ婆羅門法を破る外道の始なる。是を以て本論に。彼。吠陀論なる。馬祀法を非として。生を殺て祠。こと諸天及仙人は罪。非と云。とも實。これ罪ありと云り。上。載。る。自。性。先。生。覺。とある處の謂ゆる五法中。一。不殺。とあるも。是より立。たる。よ。て。此。仙。が。始。たる戒なり。然。佛祖が不殺生の戒も。是法を襲。る法なる事。知。れ。たり

滿。千。年。已。而。復。來。重。説。上。言。阿。修。利。答。曰。戲。仙。人。聞。已。復。去。其。後。復。更。來。又。説。上。言。答。之。亦。如。是。仙。人。語。曰。汝。能。修。道。不。阿。修。利。言。能。修。仙。人。即。爲。説。三。苦。言。一。內。苦。謂。風。熱。淡。等。從。臍。下。是。爲。風。處。從。臍。上。至。心。名。熱。處。從。心。已。上。名。爲。淡。處。有。時。風。大。增。長。逼。痰。熱。則。起。風。病。熱。淡。又。爾。如。是。名。自。苦。八。分。豎。方。能。治。身。苦。心。苦。者。可。



愛別離。怨憎聚集。所求不得。分別此三。則生心苦。

この内苦二種の中。身苦の説は。上壽吠陀の處。辨る如。吠陀論の説なり。

二外苦。謂世人禽獸蛇山崩岸圻等。三天苦。謂寒熱風雷電等。時阿修利即便信捨家法。修出家行。因説二十五諦。度脫爲弟子。云々とあり

此論の今本は。誤脱錯亂なと多。文義の通ざる所も少らざ。今は百論疏。引所と互に異なる文を校正して引たり。輔行記。は得五通前後各。知八萬劫。徧觀世間。誰堪度者。見一婆羅門。名修利人間遊行。問言。汝戲耶。答曰。然。又過二千歲。問能修道不。答能。因爲説三苦。云々とあり。今と少異なり。然。有と此發端の文。阿修利が千年。一度つゝ。天祀を行

る毎時。迦毘羅仙が來りと言。彼仙人を。從空生など云るは。悉妄誕。よて論。よ足。其の華嚴經音義。迦毘羅城の處に。具云。迦毘羅。幡宰都。言。迦毘羅者。此云黄色也。幡宰都者。此云所依處也。上古有黃頭仙人。依此處修道。故因名耳。と有。其住る所は詳なるをや

名義集諸國篇も同。此は佛祖が。父祖の代々領る國あり。華嚴經音義に佛弟子なる劫賓那を。此云黄色也。謂此尊者。上祖。黃頭仙人。因爲族。此則氏族爲名也。と有。は子孫も有。とな

また因明論疏に。成劫之時。有外道。云。劫毘羅。此云黄赤色。以頭髮眉面色。皆黄赤故。古云。迦毘羅仙。訛也。造二十五諦論。乃恐身死。不傳。即問。自在天長主。法此洲。頻陀山下。食餘甘菓。即得久住。



化作大石。方圓如一。張床。とも見たり。

止觀輔行記にも迦毘羅恐身死。往自在天。問天。令住頻陀山。取餘甘子。食可延壽。食已於林中化爲石。如牀。大有不逮者。書偈問石。後陳那菩薩斥之。書偈石裂。と云り。世親論師が傳は迦毘羅が末流の頻闍訶婆娑と云者。石と化する由云り。さて二十五諦説の次々傳來せる趣。金七十論偈も秘密。大仙説と有て秘密者。施五德。婆羅門。不施餘人。故名秘密。五德者。一。生地好。二。姓族好。三。行。四。有能。五。欲得。具此智慧。乃堪施法。餘則不與。

大仙説者。迦毘羅仙人。如次第所説と釋し。是智勝吉祥牟尼。依悲説。先爲阿修利。次與般尸訶と云る偈の釋に。此智昔四皮陀。未出時。初得成就。因此智。四皮陀及諸道。後得成就。故説最勝吉

祥。牟尼依悲説者。迦毘羅大仙人。依大悲故。先爲阿修利。説阿修利仙人。次爲般遮尸及頻闍訶。説是般遮尸及頻闍訶。廣説此論。有六十千偈。次第乃至婆羅門。姓。拘。式。名。自在。黑。抄。集。出。七十偈。と云。

牟尼とい。迦毘羅仙を言り。此論の備考に牟尼者此云寂默。離癡亂義と云。立應が雜阿毘曇心論音義。牟尼經中或作文尼。舊訣言仁應云。茂泥。此云仙。通内外。謂久在山林。修心學道者也。とあるが如。六十千偈は謂ゆる僧佉論とも迦毘羅論とも云る論のことと聞其を略せるが此金七十論ある由なり。偕この二十五諦の智。因て。四皮陀及諸道後に成ことを得たりと云るは勝を己が法。歸せむとての妄誕あることと言まくも更なり。



また弟子次第來傳受大師智。自在黑畧說。已知實義本。とある  
偈の釋に。此智者從迦毘羅來。至阿修利。阿修利傳與般尸訶。般  
尸訶傳與褐伽。褐伽傳與優樓佉。優樓佉傳與跋婆利。跋婆利傳  
與自在黑。得此智。見大論難可受持。故畧抄七十偈。七十論與六  
十萬義等。外曰。大論與七十有何異。答曰。昔時聖傳及破他執。彼  
有。此無。是異義とも言り。

大論とは彼六十千偈の僧法論を云。昔時聖傳とは猶異所  
よ聖語聖言とも云。て其の梵王梵天の所說なる由見たれ  
ば聖傳も共よ吠陀の傳説なるべきを傳ざるは最惜き事  
あり。偕此文よ優樓佉とあると次よ論衛世師論を造る仙  
とは別人と聞たり。其を此優樓佉と同人と見ては時代合  
さればなり。外とは數論師の外なる道の人を廣云り。

また因明論疏よは。迦毘羅仙後弟子。十八部中。上首者名。筏里  
沙。此名爲雨。雨時生。故即以爲名。其雨徒黨名。雨衆。造論者及學  
人名。數論師。造二十五諦。亦名金七十論。即是數論。梵云僧佉奢  
薩。但羅謂以智論。數度諸法。從數起論。論能生數。故名數論。と有。  
合考べし

また廣百論よ。記論外道とも云り。即其音義よ伽毘羅論是  
也。と有。

さて從數起論。論能生數云々とは。上二十五諦の所よ記る如。  
從某生某。其某有若干某。とまづ云て。其若干の某よ。また若干  
の某ありと次々よ論を起し。各數を生トて。論る故よ。數論と  
號る由あり。

其分派しつゝ。立たる名數の多こと七十論を披見て知べ



中々に此の説盡べくも非  
 但此の迦毘羅仙が始る教方あるが。後佛祖。その教方を  
 竊して。佛法は。なほ此。外道は十倍して。言痛名數を多立た  
 り。其は近。諸乘大藏三藏など言。法數の書等を見よ。中は彼  
 と此と。強て對合せむと欲して。立る名數も甚多り。  
 然ど此は文の章ある由。其方の書は云るもあり。文の章も  
 事よこそよれ。是等は兒戲等。さ態よこそ。

印度藏志略一之卷終

印度藏志略一之卷正誤

葉數	行數	誤	脱	訂	正
六表	六	毘紐天紐		毘紐天紐	
七表	一〇	思旨有ば		思旨有ば	
全	全	次々に論を		次々に論を	
七裏	八	摩醯首羅		摩醯首羅天	
八表	二	諸經論等悉佛滅後		諸經論等悉佛滅後	
八裏	四	玄辟譯		玄辟譯	
一〇表	一一	今在大梵天王		今在大梵天王	
一〇裏	一一	娑難陀那		娑難陀那	
全	一一	四有自然生		四有自然成	
一一裏	二	據驢主		據驢土	
全	三	歷十世		歷千世	
一二表	二	言痛		言痛	



一三裏	一〇	志ぬ者
一五裏	五	説鈴
一七表	一二	世記經等に
一八表	八	生智
全	九	二法
一八裏	五	壽とある體を
全	六	能持煥及讚と云
一九裏	一二	毘耶婆問經
二一表	四	四藥陀書
二二裏	七	勤婆婆仙
全	八	諦さふ
二四表	五	明崇
全	九	明崇
全	一〇	神の崇

志す者
説鈴
世記經共に
生智
二法
壽とあるを
能持煥及讚と云
毘耶婆問經
四藥陀書
勤婆婆仙
諦さふ
明崇
明崇
神の崇

二四裏	五	崇をも
二五表	一	有光明
二七表	五	覺る
二八表	七	云傳にて
全	全	警戒
二九表	一〇	瞋怒
二九裏	二	以財施
全	二	顯彼法身
三〇表	四	亦少か
三一裏	一〇	事諸火神日月星宿
全	一二	經毀
三四表	八	至于闕
全	九	于闕
全	一〇	不聽賣經

崇をも
有光明
覺る
云傳にて
警戒
瞋怒
以財之施
顯彼法身
亦少か
事諸火神日月星宿
輕毀
至于闕
于闕
不聽賣經



三五表 三

增一阿含品に

增一阿含に

三六裏 四

袖之

神之

三七表 一〇

不知

不知

三八裏 八

號る

號る

三九表 二

七寶

七寶

全

身容赫變

身容赫變

三九裏 五

劣る趣たるを

劣る趣あるを

全

歩林

歩林

四〇表 一

歩林

歩林

全

勃琳

勃琳

全

異譯

異譯

四一裏 一

近道

外道

四三裏 一

冥然

冥然

四四裏 七

世門

世間

四五表 六

住生死

住生死

全

薩埵相

薩埵相

全

薩埵相

薩埵相

四六裏 三

薩埵相

薩埵相

五〇表 二

自苦

身苦

五一表 二

具云迦毘羅囉囉都

具云迦毘羅囉囉都

全

古云迦毘羅囉囉也

古以下八字當作註

全

自在天長生法

自在天長生法

五二表 七

舊訣

舊譯

五二裏 四

得此智

自在黑得此智

五三表 二

雨時生故即以爲名

雨以下八字當作註

全

梵云僧法奢薩世羅

梵以下八字當作註



15  
2  
10



